

NHK学園生涯学習フェスティバル
伊香保俳句大会

令和元年六月二十六日(水)

午後一時～四時

群馬県伊香保温泉 ホテル天坊

第一部

一、開会あいさつ

NHK学園生涯学習局長
洪川市長

砂押 宏行
高木 勉

一、選者紹介

一、対談「名句の所以」

小澤 實
西村 和子

― 休憩 ―

第二部

一、表彰

一、選評

NHK学園俳句講座講師・「ひろそ火」「ホトトギス」

「オルガン」
木暮陶句郎
鴫田 智哉

NHK学園俳句倶楽部講師・「知音」
(五十音順・敬称略)

西村 和子

選評司会
木暮陶句郎

一、当日句「伊香保の夏を詠む」入選発表

一、伊香保温泉宿泊券の抽選

一、閉会のことば

洪川伊香保温泉観光協会会長
大森 隆博
総合司会 フリーキャスター
北林きく子

い あ い さ つ

NHK学園理事長 浜田 泰人

本日ここに「NHK学園生涯学習フェスティバル 伊香保俳句大会」を、皆様とご一緒に開催させていただきます。

今回お寄せいただいた作品数は、自由題、題詠「温」あわせて四、四七五句にのほりました。お寄せいただいた俳句の一つ一つは、作者おひとりおひとりの心のうちに、この文芸が深く根を下ろしていることを教えてください。日々のくらしと経てきた人生経験を見つめ、俳句を通してみずからの言葉と心のあり方を探求されておられる方々がこんなにも多くいらつしやることを知り、心より感銘を受けております。

わが国の古い伝統の上に築かれた短詩型文芸は、時代が変わってもその意義は変わりません。

昭和五十六年に開設された俳句講座は、これまでの三十七年間に、五十四万人を超える方々が学んでこられました。この流れがさらに大きく豊かになっていくことを願い、講座内容をはじめこのような大会や俳句学習の旅（スクーリング）など、教育文化事業の充実に、なお一層努めてまいりたいと思っております。多くの皆様のご参加とご支援を、よろしくお願い申し上げます。

なお、本日の大会大賞三作品は、各地で開催される大会の大賞作品とともに令和元年度の文部科学大臣賞候補作品となります。

最後になりましたが、大会の開催にあたり、選者の先生方、ご投句いただいた皆様、ご協力をいただいた群馬県・渋川市ほか関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和元年六月二十六日

ごあいさつ

群馬県渋川市長 高木 勉

山の緑が色濃さを増しまばゆいばかりの季節となりました。今年もここ渋川市伊香保温泉においてNHK学園、渋川伊香保温泉観光協会の主催、NHK前橋放送局等後援にて「NHK学園伊香保俳句大会」が開催できますことを渋川市民の代表として、心より厚く御礼申し上げますとともに感謝申し上げます。

伊香保温泉には本大会の前身「俳句のつどい」として始まった頃から、今年で第二十七回目を迎え、過去の大会でご講演いただいた著名な先生方の句碑を温泉街に建立し、温泉もさることながら文化的にも多くの情報を発信し続け、文化振興にも大いに貢献して参りました。

今年は題詠を「温」と設定し全国より四千四百七十五句ものご投句をいただき、名実ともに「俳句の街いかほ」に成長したものと確信しております。

最後に本大会でご対談いただく「澤」小澤實先生、「知音」西村和子先生をはじめ選者の先生方、ご投句、ご参加くださった皆様並びに、ご後援団体、催しの周知にご尽力いただいた報道各社をはじめ、ご支援、ご協力賜りました関係各位に心から厚く御礼申し上げます。

令和元年六月二十六日

い あ い さ つ

洪川伊香保温泉観光協会 会長 大森隆博

山々のみどりが美しい洪川市伊香保温泉で第二十七回『NHK学園伊香保俳句大会』をNHK学園と主催し、NHK前橋放送局等後援にて開催できます事に心より厚く御礼ならびに深く感謝申し上げます。

『俳句の街いかほ』として著名俳人の句碑が、現在温泉街の中に九基（上田五千石、金子兜太、鈴木真砂女、鷹羽狩行、岡本眸、鍵和田袖子、深見けん二、平井照敏、伊丹三樹彦各先生）点在しております。本日ご参会いただきましたお客様のの中にもすでに句碑をご覧になられた方も大勢いらつしやるのではと推察いたします。

本大会では題詠を設定し、今回は『温』、全国より四千四百七十五句をご投句いただき、名実ともに『俳句の街いかほ』として定着したものと実感しております。

最後に本大会でご対談いただく「澤」小澤實先生、「知音」西村和子先生をはじめ選者の先生方、ご投句、ご参加いただいた皆様ならびにご後援団体、催しの周知にご尽力いただいた報道各社、ご支援、ご協力賜りました関係各位に心から厚く御礼申しあげます。

令和元年六月二十六日

対談・選者



小澤 實（おざわ みのる）「澤」主宰
 昭和三十一年長野県生れ。平成十二年「澤」創刊、主宰。俳人協会常務理事。読売新聞・東京新聞俳壇選者。句集『砦』『立像』（俳人協会新人賞）『瞬間』（読売文学賞詩歌俳句賞）。評論『俳句の始まる場所』（俳人協会評論賞）。

滝壺に水の大塊墜ちつげる



西村 和子（にしむら かずこ）「知音」代表、「伴」同人 NHK学園俳句倶楽部講師
 昭和二十三年神奈川県生れ。俳人協会理事。清崎敏郎に師事。NHKラジオ「文芸選評」選者。毎日新聞俳壇選者。句集『夏帽子』（俳人協会新人賞）『心音』（俳人協会賞）『椅子ひとつ』（小野市詩歌文学賞）など。著書『虚子の京都』（俳人協会評論賞）『季語で読む源氏物語』『季語で読む枕草子』『季語で読む徒然草』『俳句のすすめ・若き母たちへ』『気がつけば俳句』など。

白玉の粒揃ひとは味気なく

選者



木暮陶句郎（こぐれ とうくろう）「ひろそ火」主宰、「ホトトギス」同人
NHK学園俳句講座講師
昭和三十六年群馬県生れ。平成十二年「ホトトギス」同人。平成二十三年「ひろそ火」を創刊
主宰。稲畑汀子、廣太郎に師事。第九回日本伝統俳句協会賞、第十回花鳥諷詠賞、第二十二回
村上鬼城賞正賞などを受賞。群馬県俳句作家協会副会長。夢二忌俳句大会実行委員長。毎日新
聞群馬版「文園俳句」選者。上毛新聞「上毛俳壇」選者。群馬県文学賞選考委員。伊香保焼主
宰の陶芸家。句集『陶然』。

冷酒酌む少し淋しき唇に



鶴田 智哉（ときた ともや）「オルガン」同人
昭和四十四年千葉県生れ。「魚座」「雲」を経て現在に至る。句集『こゑふたつ』で俳人協会新
人賞、『凧と円柱』で田中裕明賞受賞。

枇杷の実のひとつが置かれ人のやう

全作品を名前を伏せて、全選者にそれぞれ入賞入選作品を選んでいただきました。大賞、特別賞は特選の中から選の重なりを考慮しつつ、NHK学園大会事務局で決定しました。

NHK学園伊香保俳句大会大賞

サングラスとり参観の母となる

新潟県 中澤安子

耳鳴りの鬼へ柵挿しひとり

群馬県 茂木妃流

△題詠「温」▽

女将らが元気湯街の盆踊

群馬県 金子笑子

群馬県知事賞

春泥を跳び弟も跳べと待つ

徳島県 大西一騎

澁川市長賞

自転車を立て漕ぎにせり水温む

岡山県 高原晴子

澁川市議会議長賞

葉桜となつて都会にまぎれけり

茨城県 神谷たくみ

澁川伊香保温泉観光協会会長賞

金魚鉢はなして二つ波静か

滋賀県 田中茂三

NHK前橋放送局長賞

今年又飾らぬままの古雛

群馬県 佐々木美恵子

上毛新聞社賞

うららかなや街に湯の道人の道

埼玉県 平井萌黎

小澤 實選

特選

春泥を跳び越えて、弟にも「跳べ」と言って待っている。兄

は跳び得たが、弟はまだためらっている。てらてら光る春泥を挟んで、二人の少年が緊張感を含んで立つ。この兄弟は小学校高学年くらいか。動詞を三つ用いながらも、一切ゆるみを感じさせない叙法もみごとと言えよう。

涅槃図や絵解きの穂先象の上 広島 神根 信

涅槃図を掛けて、絵解きをしている。釈迦の入滅を説くのだ。筆のようなもので指し示す先は、嘆いている象であるというのだ。涅槃図の句は、画面をそのまま描くことが多い。このように絵解きを詠んでいる句は初めて見た。涅槃図とは元来このように用いたものかもしれない。

……題詠「温」……

女将らが元氣湯街の盆踊 群馬 金子 笑子

温泉街の盆踊りである。湯宿の女将たちが元氣に踊っている。若女将ではない、女将だ。長年湯宿を経営してきた女性たちが、中心となっているのがうれしい。浴衣の着こなしもみごとなのだろう。温泉の湯が元氣にさせているのだろう。「元氣」の二文字が一句に生命を吹き込んでいる。

秀作

蜜豆を食ふ人生は一度きり 東京 山下 直
 踏まるなゴミ集積場のたんぽぽよ 新潟 茨木ゆき子
 歩きたく歩くしあわせ青田道 滋賀 馬場 弘子
 同期とは友でライバル新社員 千葉 毘舍利愛子
 バスケツトシューズ靴に卒業す 群馬 中島 弘子
 ヘルメット脱いで汗拭くガードマン 島根 井塚 紫香
 たんぽぽや軍艦島に三輪車 東京 関 美奈子
 花冷や緋総に結ぶ般若面 埼玉 町田 定夫
 記念樹に存分の水卒業す 埼玉 今村 直子
 パンツにも名前を書いて入園す 兵庫 岸下 庄二
 草刈や振るふ大鎌爺仕込 神奈川 大石 金雄
 風光る補助輪をきょう外します 北海道 後藤 明美
 読み耽くる一灯のみや夜長妻 秋田 坂 一草
 とどまらぬ蛙軍の月夜かな 愛知 大成 金吾
 火の神が風の神恋ふどんかな 群馬 木下 涼薫
 被災地の三月未だ霊の泣く 新潟 笠原佐千子
 鶴篝の火の粉烏帽子に流れ落つ 千葉 桐畑 佳永
 若水や長寿の猫の茶碗にも 新潟 小林 智子
 狼の檻を潜りて雀の子 神奈川 前山 真理
 焼き上がるパンの匂ひや草むしり 埼玉 伊古田益代
 ……題詠「温」……
 耕して来しコーヒーを温める 埼玉 吉田 武夫
 温泉に雪の月山眩しめり 山形 富樫 桂子
 水温む洗い場の中ハヤの群 福岡 江崎 清
 長長とつかる微温き湯霧の宿 群馬 塩谷多鶴子
 啐啄の相打つ音の温かし 埼玉 山田 収一

◆佳作◆ 掲載は氏名五十音順です。

春耕や鴉が運ぶ腕時計	青木 令	天高し大地を叩く馬の尿	有子山俊之	何本も鎌研ぐ兄や水温む	金子日出子
菜の花や北の大地を飛行船	赤繁 忠弘	赤ん坊のけたけた笑い春日和	内堀 順子	口と頬刺して目刺と亭主売る	加林 悠
振袖の孫の遺影やさくら餅	安積 邦夫	おへそ出し愚図る子明日は夏休み	内山えいじ	肉太の茎折る音や蕨狩	神根 信
石積みの森の教会風光る	阿部ひで希	ゴールテンウィークや自転車を磨く	内海 恵子	洞ろなる羅睺羅の眼涅槃の凶	神根 信
スーパールのちらし広げて日向ほこ	安部みさ子	うす若き葉に母のこと桜餅	江藤隆刀庵	冴え返る天に不動の大櫓	神谷 鏡子
日の淡くカズオ寂聴桜餅	天田あすなろ	夕映えの古墳の上を鳥帰る	大浦 信子	何よりも健康大事風邪引かぬ	川井田ヨシ
良き日なり紫木蓮には赤ワイン	あまの樹懶	冴え返る力士の尻の絆創膏	大崎 喜和	記念樹の桜すなほに老いてをり	川口 茂則
日向ほこ媼のひざに猫二匹	新井 忠彦	露の臺を混ぜほろ苦きハンバーグ	大須賀恵美子	野遊の草の冠り母の頭に	川崎のぶよ
蟻拾ふ外国人や風の磯	有田 耕三	黒猫が落葉ふむ道夢二館	王田 佗介	露の臺ポツポツとポツポツと	川田 嘉子
赤子泣き命の汗をかきにけり	石井 俊子	砂浜に妻の鼻唄春の風	大野 兼司	大揺れの寒緋桜や軍馬の墓	菅野 孝子
しるがねのアルプス遙か青き踏む	石川 賢吾	大利根の源流はるか鳥帰る	岡崎 昌子	草餅や家に古びし杵と臼	菊地 孝也
「てんでんこ」涙の響き春の雨	石川 卓	山てふは水のかたまり滴るる	岡田 春人	看護婦の絞るタオルや水温む	菊池 洋勝
湯上りの鳴らす駒下駄夏隣	石原ふさ子	水底にざりがに目高水面に	小川美津子	記念樹の桜に集ふクラス会	岸下 庄二
永き日をあまさず使ひ畑仕事	磯貝 晴子	咲き満ちて一本桜冷えまさる	小野 雅子	這ふやうに犬のふぐりもたんぽぽも	岸本眞智子
飼い猫が屋根で寝そべる春近し	伊藤 忠	千年の光眩しき古代蓮	小濃 勉	丹頂は人工給餌に「ククルル」と	喜多 豊子
たなうらをこぼるる子猫のぼる子も	稲葉由美子	がむしやらとなれる幸せ薔薇芽吹く	有田川あき	上履きの左右確かめ一年生	北浦 敏子
朝桜鏡に髪を梳く娘	今井 理務	春の雲水の厚みに鯉泳ぐ	片上 強	白椿備前の壺に一枝かな	北浦 敏子
ト口箱にパンジー咲かせ漁師町	今井 妙	山焼きやいま天平の朱を慕ふ	片上 強	花筏曳きて鯉寄る西行忌	北浦 敏子
冴返る津波のうねり鮮明に	岩上 利一	石鹼の盗人見たり烏の子	片桐傳一郎	川辺りの菜の花賞でて橋の上	北川 智子
楼蘭の女人の端切れ陽炎へり	植田 一美	紫陽花や傘さしながら淡く描く	片桐 正信	苗札やアイスの匙で揃えられ	北島 孝子
野は地球天は宇宙よ揚雲雀	植田 一美	片付けよ少し周りを春炬燵	加藤 清美	貫います捨てるんだつたらつくづくし	北村 薫

犬ふぐり星にも生死ありといふ	木原 登	温泉を飲みて百まで百千鳥	笹岡紀代子	踏青や足裏でのちさんざめき	菅原 若水
シャッター街独り歩くや冴返る	木村 峻一	鍵盤をゆつくり閉めて卒業す	佐々木亮子	じゃが蒔を植ゑた辺りに地割れかな	杉田 英次
踏青や真つ正面に榛名富士	楠 暢太	漁労長の塩辛声ののどけしや	佐藤 無風	ハグほぐれ再びのハグ花の下	鈴木 計廣
腰に鳴る熊よけの鈴きのご狩	工藤 進	小鉄の軽き鈴の音花の雨	佐藤 栄子	横丁を曲がれば昭和春満月	鈴木 周子
たんぼぼや二両列車の久留里線	栗山 純臣	青空に神社の桜よく似合う	実沢 愛子	俯瞰して紅白梅の谷浄土	諏訪美和子
水中花老舗旅館のフロントに	黒木 淳子	夕焼けに会ひに堤にのほりけり	座間 英幸	薄水の貼り付いてゐる室外機	関 雅己
しやぼん玉吹き続ける子顔上げて	香山 直子	雲のいろ大空のいろ春近し	澤田 れい	あたたかや足に馴染むる宿の下駄	関口 昌秀
生命線見せ合うてゐる日向ぼこ	小久保以久	春暁やステージ四の痛を取る	椎名 貴寿	夏草や駅の外れの転車台	関根 勇
切株の木椅子に座せば囀れり	小暮 牛男	恋猫やおおう逢おうと夜もすがら	塩川 薫	携帯を鳴らして捜す春の昼	瀬端 忠男
ラムロースほどよく焼いて花の宴	後藤 明美	浅間嶺の噴煙なき日彼岸晴	塩野 恒子	天守閣より一望の花見かな	曾根新五郎
二秒ずつ進む秒針春の昼	小橋 辰矢	案山子佇つ見なれし父の背広着て	繁山 邑子	春の日や声の高きは母の歌	高木 慶子
澄む秋やゆつくり回る観覧車	小林 美峰	介護士の労る声や春の雨	篠原 恵子	雛の灯や主役は生後四ヶ月	高木ヤエ子
這い跡の光の先の蚯蚓かな	近藤精一杯	側溝の水迸る雪解かな	篠原 正明	囀や火入れ待ちいる登り窯	高桑ひろみ
小鳥来る高野の廟の明るさに	斎藤 詳次	火櫓の一輪挿しや白椿	芝田 太	赤城嶺の雲影迅し卒業期	高桑ひろみ
春の波七段とびの礫かな	斎藤千寿子	龍太全集読み継ぐ窓辺沈丁花	柴山 要作	玄関に新しき靴入学す	高田千鶴子
桜前線まちかと校長式辞かな	斎藤ひでを	絡繰は家康公や花の城	清水 孝雄	牙ゆる灯に見入る夢二の書簡かな	高田みづ紀
漬物と走り茶村の美容室	坂口 智弘	曇天に朝の桜のしづかなる	清水 洋	天皇の黒髪匂ふ初夏の国	高梨 裕
あやかしと君のつぶやく海市かな	坂本 徹	城濠の春の濁りに鯉の髭	清水 檀	みちのくや勿忘草を配る人	高梨 裕
果つる平成夕さりの飛花落花	佐川 光	春風や脚立のうへの図書委員	清水 良郎	春の夜の旅の一座の女形かな	高野 富男
筍の忽ちむかれ茹でられる	崎田 定雄	閑上の復興なかば鱧干す	白井美沙子	春荒れの浄土ヶ浜や地震八年	高野 富男
木目込の雛に髪を乱れかな	櫻井 詩子	朝市や婆とりたての茗荷の子	城田 嘉三	味の濃き男の料理麦の秋	高橋きよ子
もの持たぬひいな指の長さかな	櫻井 八石	桜散る看取り短き訣れかな	新宮すゑ子	紅色を極めつつじの帰り花	高橋 涼純
永き日の出湯の香る日和かな	笹岡紀代子	盆僧の足袋の白さや風通る	菅野 公子	からころと湯の町歩く宿浴衣	高橋 澄子

あぢさゐに触れてもの干す朝かな	高原 晴子	美しく立山晴れて卒業す	中沖 正之	海光のあふるる入江春の鳶	野田 利勝
霾や駱駝の背ナの赤い布 <small>きれ</small>	高原 晴子	徘徊の母へ落花のひとしきり	中込 儀一	訃報欄齡下ばかり冬銀河	野村 瑠以
ガリ版の春の色出す三度刷り	田口 穂心	新涼や一筆に描く竹の幹	中澤 睦子	初夏や山湖に湧きし若き声	橋本 房子
被災地にいつも通りに桜咲く	武井 良子	仔雀の先ずはよちよち重き身よ	中島 啓介	夕陽なか降りくる朱鷺や佐渡の森	畠山 道雄
受験合格はたし兄弟素振りのバツト <small>パス</small>	竹測てる子	鉛筆を削りし木の香春深し	中島志づ江	春深し大工の耳の小鉛筆	畠腹 亨
春耕や百まで生くる顔をして	田中 隆	大正の香りほのかに内裏雛	中條今日子	馬酔木咲く平成終る御所の庭	濱田 和
子育ては生きる喜び燕来る	田中 基之	天下盗り要の城の芝青む	永田 満男	夕ぐれの峽にひびける猪威し	濱中アキ子
露の世の露にまみれし九十四	田中 米蔵	晩節は艶やかであれ真砂女の忌	中西 定子	瓶で米搗きしことあり敗戦忌	谷川 治
あたたかやポニーに乗る子並びをり	谷口 一好	下萌や残念石の四百年	中根 武郎	白梅にめじろ来ている奥三河	原田 純一
辣菰漬く嫌がる妻を説き伏せて	種元弘一郎	照射待つ腹のばつてん花鎮め	長嶺奈都子	累代を峽に代掻き峽に死す	樋口 昇る
血脈の我にて終る冬の蠅	田村久美子	指切りの約束遠し花菜径	奈良壽美子	石段の風に空蟬二段飛ぶ	久田 正己
切られたる株に赤芽や山法師	千原 道子	巢作りの鳥が一枝落しけり	奈良壽美子	ヤツホーと言へばヤツホー山笑ふ	毘舍利道弘
春光やひよこの羽根のレモン色	塚本 治彦	マスク取る老先生の片ゑくぼ	西岡 青波	打ちたての鯉鮎光りぬ春の潮	美倉かな
コーラスにメタセコイアの芽吹きけり	角田ひろ子	雛の宵上り框に猫帰る	西川 明美	殉教の島より来たる小鳥かな	深沢 頼子
十二単少しほつれて享保雛	角田ひろ子	父の日や一升瓶を提げて来し	西川 金治	大奥のごとく牡丹の咲き乱る	深津 曙山
わうごんの初日の羽や水平線	露木 伸作	鋤鉄の洗ひ干されて紫木蓮	西村 英雄	苗木城の巨岩に裂目鎌鼬	藤墳 博明
雨情居へ輝き入りぬしゃぼん玉	鐵 福夫	西行忌吉野懸仏おろがみぬ	西本 文子	さくら桜さくらまつりの日本かな	藤平嘉兵衛
未帰投の僚機の影か春の星	手塚 雅風	明日のため靴洗う子に春の風	額田 昌安	老妻の飾る雛や一刀彫	藤村 義治
春風の廃線跡に残るホーム	豊田 民子	辛せは酢牡蠣喉元過ぐる時	沼田 泥舟	恋猫の思いの丈を鳴き通す	藤森 のり
春の宵父を抱えて湯治かな	内藤 達彌	深深とスコップを挿す土の春	根岸 善行	花鯉ひらひら散らす春の夕	星野 裕子
いくさ無き代の河原湯のほととぎす	長尾 登	せせらぎに踝ひたし青榛名	根本菜穂子	大魔羅の山の神立つ春祭	北 悠休
鞆鞆やおかつば味噌沼昭和の子	長岡 和恵	春野菜軽トラ市の賑はへり	能田 孝昌	外の湯に吹雪く桜に溺れけり	堀田 英夫
根上りの松へと桜吹雪かな	中沖 正之	菜の花や網を繕ふ老漁師	能田 孝昌	木の実落つ木の間がくれに栗鼠の貌	堀 昭治

卒業式空席つひにそのままに	堀	昭治	湯の街の湯の香ゆたかに遠青嶺	茂呂 典正	温泉の火照りを冷ます団扇風	安部 孝
年用意画鋏の穴にさす画鋏	堀口りつ子		ふらここや怒りん坊も泣き虫も	柳澤 友香	権兵衛の厨の水も温みけり	あまの樹懶
榛名嶺の笠雲一つ蓬摘む	牧野美知子		石投げて氷柱落せし日の遅刻	藪田 拓司	声はづむ集団登校水温む	安在 宗風
鶯の全き声も間近なり	益田満寿美		草萌や飼主よりも半歩先	山岸 嘉春	温泉は同じ町内浴衣掛	伊藤 忠
春めくや今朝の陶土の練り加減	柘野 雅憲		春耕にまだ借地増す八十路かな	山口 勝	糶殻の苗床に挿す温度計	稲葉 京閑
ほろ苦き恋にも似たり露のたう	松岡 孝子		花冷やバター滑らすフライパン	山口美恵子	城内に母校のありてあたたかし	井上 昌子
一川を覆ひ尽くせる桜かな	松岡 孝子		二人してひらく卓布や芝青む	山口美恵子	沼の底這ふ影ありて水温む	今井 理務
千万の菩薩の在す苔の花	松本 余一		着ぶくれて東京駅に降立つや	山口 雄二	猿楽の翁の舞や水温む	岩上 利一
数式の躍動春の日の板書	松本みゆき		海峡の大橋かすみ島かすむ	山崎 文恵	真黒な温泉玉子山笑ふ	岩野 記代
酒を受く気骨溢るる生身魂	松本 弓子		宿下駄の響く伊香保や夏の夕	山田 富朗	焼きたてのパンの香りや水温む	小島 徹
駆け登る長き石段入学児	萬年 和子		リヤカーにあふるる園児春堤	山田ユリエ	湯上がりの温泉たまご桜東風	大沼 遊山
いにしへの噴火の岩に木の芽張る	三浦 節子		戦中の土の雛も並べけり	山之内喜七	風呂桶を持寄り村の糶浸し	大野 善雄
夫の名を独り言ちたりわらび餅	三浦 美苗		風待ちの夕顔に風来たりけり	山本 いく	名湯の伊香保に年を惜しみけり	大平 政弘
噴煙の直立厳冬の選挙戦	右田 捷明		永き日の我朗読に聴き入りて	横山はるみ	乳母車に二人の嬰兒水温む	岡野 弘子
山国の轍は深し桃の花	三橋 順子		碧い空きらめく紅葉透過光	吉井 功	苗床の温度読取日課かな	小川美津子
上空は青空西は夕焼けて	宮本 宏江		料峭の野外劇場風ばかり	吉田 泰子	石段の温泉街を青嵐	奥山 功
吹かれていて蛇の衣の目玉もつ	村上 成子		親燕愛し愛しと子の口へ	吉原美代子	温泉とまんじゅうの湯気町うらら	小沢 秀子
海の上に陸を浮かせる蜃気楼	村上 秀吾		モダンジャズ流るる先に苗木市	米田 陽子	浮き浮きと妻の鼻唄水温む	片桐 正信
大杉がパワースポット山笑ふ	村田 浩		岩魚釣る傘寿の今を楽しみて	若林 正人	友ありて酒温めてこれで良し	狩野 花朶
料峭の瞳窄めるカメレオン	村田 淑子		ターザンを真似て木に立つ裸の子	若林 正人	温め酒父の遺せし銚釐かな	神根 信
石段の伊香保温泉夏に入る	室 達朗		隙間風粗朶もて塞ぐ避難小屋	若林 正人	集落はただ三戸なり水温む	菊地 孝也
手作りのケーキも焼いて雛の宴	目黒 輝美		……………題詠「温」……………		冬温し床屋の椅子でブルームス	菊地みさ子
ラジオから昭和の歌謡山笑ふ	百瀬 信之		白梅や足湯に浸りサリンジャー	麻生 勝行	雨温し陶師泥手のまま語る	北浦 敏子

ドアノブにかける伝言水温む	北原かおり	水温む洗顔の水飛ばしつつ	谷口 一好	皿洗ふ妻は鼻唄水温む	目黒 輝美
ゆく雲と話す人をりあたたかし	木原 登	土竜寝る上に温泉眠る吾子	月城 花風	見はるかす榛名群峰水温む	茂木 妃流
湯の町の足湯眠たく花の昼	工藤ひろし	触らせてもらふ胎動四温晴	出口 裕興	水温む漕ぎ出す湖の波光る	望月 節子
水温むさみどりの葉の洗ひたて	蔵 堯子	温帯低気圧つばめ低く飛ぶ	寺島 麦	決壊する温泉卵残る雪	百田登起枝
水温む鯉は飛び跳ね泡の立つ	木暮 千江	水温み水のふくらむ疏水かな	富樫 幹	掬ひたる手に生温く蝌蚪の卵	八木澤 貴
温め酒びんびんころりあくがるる	小塚 信江	花冷えの右手温む左の手	長島 武彦	弁当を温めなほす暮の春	ひでやん
ばばさまはぬくくなったと杖あるき	近藤精一杯	頭だし亀も犬かき水温む	永瀬 貞子	春風や牛舎に残る温度計	山口美恵子
露天湯や肌にはりつく花ふぶき	齋藤 伸光	蹲踞の水一杓も温みけり	奈良壽美子	飛び跳ねる尺余の鯉や水温む	湯田 畊道
夜桜や温泉街の射的音	坂口 智弘	木道のつぎはぎ巧み四温晴	西村 英雄	影踏み影追ひかけて冬温し	米倉 信山
仔猫ある店の温泉卵買ふ	泉 耿介	四温の日待ちて成木に御礼肥	根本 國男	春浅し百葉箱の温度計	渡邊 竹庵
おでん酒に温めてをり志	嶋田 恵一	水温む犬の名を呼ぶ妻の声	青木 草平		
踏み入れて春泥温し初素足	鈴木 昭子	胸に抱く猫の温もり冬籠	濱田真知子		
牛小屋の温度調整除夜の鐘	角 達朗	手水場に並ぶ柄杓や水温む	林 恵美子		
徳利も猪口も手造り温め酒	諏訪美和子	窯出しの皿の温みや雪解風	阪東 静子		
散華兵らの氏名びつしり碑小春	高木ヤエ子	旅のどか四本浸る足湯かな	毘舍利道弘		
位里・俊のアトリエぬくし人ぬくし	高田みづ紀	水温む浅瀬に鷺の漁れる	藤田 克弘		
取り入れる洗濯物の手にぬくし	武井 波真	朧夜や白銀 <small>しろがね</small> の湯に黄金 <small>こがね</small> の湯	藤根 豊		
あたたかや屋根の瓦に大黒天	武市 宣子	受験子の体温計の電子音	星野久美子		
水温む渡船で通ふ一年生	武市 良博	おしゃべりは百葉の長四温晴	堀毛美代子		
湯の町の湯気あがる川冬温し	田島多美子	石段のぬくみてをりぬ木の芽どき	松木 溪子		
あたたかや八人乗りの乳母車	田中 公子	春の川ただ座りある夫と妻	三浦 美苗		
春日差すちんちん電車の木の温み	田中由紀子	あたたかし祝宴に飲む赤ワイン	向井 昭子		
温め酒置くや指先耳に当て	田辺 国和	温泉の熱きを好み草の餅	村田 郁夫		

木暮陶句郎 選

特選

天皇の黒髪匂ふ初夏の国 神奈川 高梨 裕

元号が令和に代わり、五十代の若き天皇が即位した日本。その感動を素直に詠み上げた一句です。風薫る五月、精悍な新天皇の黒髪に焦点を絞りつつ我が国の明るい未来に思いを馳せました。下五の「初夏の国」の措辞が、作者の期待感と共に印象深く読み手の心にも迫ってきます。

サングラスとり参観の母となる 新潟 中澤 安子

サングラスの似合う母親は、もしかすると女優なのかもしれないと思いました。授業参観の日、我が子のために撮影の間を縫って駆けつけたのです。教室の後ろでサングラスを外し母親の顔となった美しい女性。気配を感じ振り返る子どもの誇らしそうな表情が見えてくるような作品です。

……題詠「温」……

温め酒いくども人に躓きぬ 北海道 赤 繁 忠 弘

温め酒という季題にご自分の半生を託すようにしみじみと詠まれた十七音。信じていた人に裏切られたこと、大切な人との恋が成就しなかったこと、などを回想しながら酌む温め酒の味は少しほろ苦いのかも知れません。「いくども人に躓きぬ」という作者の実感が季題を通して痛いほど伝わってきます。

秀作

一瞬の陽を閉じ込めし袋掛	大阪 原田 咲子
たんぽぽや軍艦島に三輪車	東京 関 美奈子
春寒し一音残るオルゴール	栃木 三橋 順子
矢のように鳥影よぎる春障子	神奈川 千原 道子
金魚ひらひら夢二の夢をぬけだして	茨城 根本菜穂子
花を待つ心わりなし河鹿橋	群馬 糟谷 節子
蛇過ぎる一瞬とその残像と	愛知 小沢 芳治
オリブの葉裏きらめく春の島	東京 松本 余一
石段に青き影落つ若楓	東京 清水 洋
人は地を雲雀は天を愛しけり	兵庫 堀毛美代子
飴色の野沢菜漬や薄氷	長野 坂口 智弘
悪友の如くに蜥蜴薄目あく	静岡 伊藤 孝一
朝寝してやさしき妻に戻りけり	神奈川 西岡 青波
若水や長寿の猫の茶碗にも	新潟 小林 智子
野遊やなんでも入る児のポッケ	埼玉 宮崎句美子
袱紗捌く男の指や利休の忌	群馬 猿渡 道子
春昼や眼をとじて待つ演奏会	群馬 橋爪 文恵
潮風に吹かれ上総の雛祭	千葉 三津木俊幸
自在鉤外し夏炉となりにけり	新潟 山之内喜七
つばくらめ家族の顔で戻りけり	神奈川 小塚 信江
……題詠「温」……	
酔えば句がうかぶと爺は温め酒	新潟 片桐 正信
温 ^ゆ の花の陶句郎窯八重桜	群馬 糟谷 節子
真黒な温泉玉子山笑ふ	東京 岩野 記代
麗かや慈顔温顔六地藏	愛媛 小西 貴子
水温む音の聞こえる水彩画	栃木 関口 ミツ

▼佳作▼ 掲載は氏名五十音順です。

冬近し今日で納めの湖畔馬車	浅井 豊子	名曲の湖静かなりつつじ炎ゆ	糸井 爽子	励まさぬことが励まし冬銀河	太田 喜子
山躑躅伊香保名水ざるうどん	阿部 月子	木の芽風杖をたよりの山路かな	今井 哲也	桐一葉在りのままなる明日を待つ	大西 國子
黴の香や太き柱の映画館	安部じゅん	児が吹いて夢のふくらむシヤボン玉	今井 陽子	ボンネットバスの轍や春の虹	大沼 遊山
石積みの森の教会風光る	阿部ひで希	記念樹に存分の水卒業す	今村 直子	大利根の源流はるか鳥帰る	岡崎 昌子
春シヨール時に甘えてみたき日も	安部川 翔	若き日のピカソの青き七変化	岩崎 幸邦	無住寺や崩れしままの蜜柑山	岡野 昇
とめどなき落花の中にゐて寂し	荒木 信夫	番犬の大きな欠伸春の昼	岩田 洋子	春愁や海を彷徨ふプラスチック	岡野 安代
遠足と遠足出会ふ交差点	飯塚 柚花	平成を少し残して春立ちぬ	岩溪 しげ	鳥帰る湖に煌めく黙残し	奥村真由美
咲き満ちてなほも余白の冬桜	池澤 光子	せせらぎの音そへられて夏料理	岩野 記代	寿ぎし新元号の春の風	小澤 初枝
貫はれぬ子猫に情の移りけり	池田 純子	往還を縁取る流れ水温む	植栗ゆうじ	仏滅の次は大安地虫出づ	小野 雅子
人知らぬ空の深さを鳥帰る	池田 純子	ちちははの影やはらかき春障子	上籠のり子	介護士の明るき迎え風光る	片桐 正信
この空に促されたる更衣	池田 純子	雉鳴きて水ゆきわたる棚田かな	内田 歩	片付けよ少し周りを春炬燵	加藤 清美
沈む日の色に染みたり鱗雲	池田タマキ	巖伝ふ春水法の池満たす	内田カヅ子	音はみな花に吸われてゆくような	加藤 順子
幾山河隔てし郷の朧かな	池田 雅夫	いちにちをまつ蜘蛛の罟の裏表	内山真理子	何本も鎌研ぐ兄や水温む	金子日出子
赤子泣き命の汗をかきにけり	石井 俊子	上州の連なる山よ冬銀河	梅澤 実	地酒買ふ石段冴ゆる出湯の町	金子 熙
梅が香やひとり住まいを捨てきれず	石川 朝子	さくら餅供えし母の誕生日	江口八重子	鉄棒を逆手に握り揚雲雀	蒲谷きよみ
しるがねのアルプス遙か青き踏む	石川 賢吾	一人行く紅葉の中の河鹿橋	江見 巖	おくやまに辛夷の花の白さやか	上村 ハル
マチユピチュの岩塩添える鮎料理	石戸 幸子	忘れゆく母の声かな返り花	大神満智子	心ふと遠く置くととき梅匂ふ	神谷 鋭子
ポマードの夫かもしれぬ春の夢	石橋 恵子	どの道を行くも灯台花菜風	大川 千草	放流の鮎に漲る力かな	河合 幸子
湯上りの鳴らす駒下駄夏隣	石原ふさ子	少年は飛び越えたがる春の川	大川 千草	いわし雲蹴りつつ帰る空手の子	川崎 和枝
磴上るたんぼぼの咲く所まで	和泉 豊	ほととぎす一気に空気軽くなる	大坂 和子	朝市の声をくぐりて燕来る	河村 葉子
ほろ苦きコーラ飲み干す桜桃忌	井出久美子	歳時記の手垢は年季風光る	太田 正之	鈴が鳴るまた鈴が鳴る遍路道	菊地 孝也

記念樹の桜に集ふクラス会	岸下 庄二	ステージの小さき奏者や木の芽風	金 民子	廃船に年月の錆鳥雲に	清水喜代美
白椿備前の壺に一枝かな	北浦 敏子	ゆつたりと時に浸りし春ひとり	金 道博	晴れ渡る三国山脈春遠く	山本 奈穂
青水無月風の時の七曲り	北野みや子	自宅兼ピアノ教室つっじ燃ゆ	斎藤ひでを	言霊の幸ふ国や青き踏む	白鳥 寛山
ふり出して榛名をかくす牡丹雪	木原 登	老いてなお入試の夢を四月馬鹿	齋藤 義雄	湯の街の昼を灯して夢二館	城田 嘉三
早世の友今いづこ鳥帰る	木原 登	春雨や蛇の目の急ぐ神楽坂	坂井 正巳	湯の町に兜太の句碑や鳥帰る	杉本恵美子
白髪を染めて銀座の春をゆく	木村 京子	春疾風下校子の列ジグザグに	坂井ます江	地下足袋でさぐる筈朝ほらけ	鈴木きよえ
白木蓮落花の吐息めく夜明け	吾亦紅	春泥を跳び越す若きアキレス腱	坂口 和代	分校のなくなる噂桐の花	鈴木 正子
公園のD51ひそと五月雨るる	木村こなみ	もの持たぬひいな指の長さかな	櫻井 八石	また一戸減りて蛍のふえし村	鈴木 正子
春の空ぐつと引き寄せ逆上がり	木村 律子	温泉を飲みて百まで百千鳥	笹岡紀代子	砂つかむ指先遠泳のゴール	鈴木 眞嘉
踏むに惜し風の足跡浜防風	桐山 甫	白木蓮ほぐれんとして光りをり	佐藤育久子	迷ふこと楽しんでゐる蝻の道	鈴木美恵子
踏青や真つ正面に榛名富士	楠 暢太	紙雛を添へある朝の患者食	佐藤さき子	風光る誕生石はアクアマリン	鈴木由里子
ツイッターに地震の地の夜の天の川	くにしちあき	初詣なかなか神に近づけず	佐藤 聡	十九の旅立ち祝ふ雛の夜	鈴木由里子
遠吠えの犬の声きく朧かな	蔵田 園子	狍犬の目力測る春一番	佐藤 敏文	嬰乳ぜり泣くボルシチの良夜かな	須田亜希子
大漁節流れる磯の焚火かな	向後 保利	銀やんま鬼押し出しの迷路かな	佐藤 美保	亀鳴くや放生池のささ濁り	角 雅行
人間の見物に来る蛍かな	神戸 千寛	斑鳩の雲に溶け込み花の雲	猿渡 道子	ふらここや時には嘘の優しさに	畝川 晶子
しやぼん玉吹き続ける子顔上げて	香山 直子	霞ゐる母と山菜採りし山	塩津 蓉子	あたたかや足に馴染むる宿の下駄	関口 昌秀
虫干や夫偲ぶもの減りゆきぬ	小久保以久	風光るもとC Aの若女将	泉 耿介	モンゴルの塩は桃色つちふれり	関矢 好枝
麦刈って風の見えなくなりけり	小沢 芳治	十薬に任せて庭の邪気払ひ	篠原 茂隆	もう軒かかざる菊の柩かな	曾根新五郎
友達友だちも来てさくらんぼ	小柴 智子	表札は未だ夫の名燕くる	篠原 弘子	遠くまで吹きし喪あけのしやぼん玉	曾根新五郎
白鳥や一声高く北帰行	後藤美智子	聴牌った国士無双や初麻雀	柴川 嘉明	雛の灯や主役は生後四ヶ月	高木ヤエ子
昭和の日新聞で折る紙兜	小林たけし	火櫛の一輪挿しや白椿	芝田 太	囀や火入れ待ちいる登り窯	高桑ひろみ
人にみな余命てふもの朧月	小林 七重	梅東風やかたかたと鳴る恋の絵馬	柴山 要作	玄関に新しき靴入学す	高田千鶴子
北窓を開きミシンの軽き音	小山恵津子	紅梅や一花余熱のごとくあり	島崎多津恵	いつまでも見えて白鳥帰りけり	高塚 早苗

味の濃き男の料理麦の秋	高橋きよ子	ひもすがら雀と遊ぶ案山子かな	直井 照男	ゆず一つ浮べてゆず湯とすることに	原田 幸子
想い出は褪せることなし桜貝	高橋 トシ	美しく立山晴れて卒業す	中沖 正之	花人の流れに躓きてはぐれけり	原 雅
柊を挿して仕度は調ひぬ	高橋みつる	利根川の水音高し柳の芽	中島 秀雄	流れ行く川にとどまる春の月	馬場 弘子
五月雨に大正琴の漏れる窓	高橋みつる	バスケットシューズ靴に卒業す	中島 弘子	春光や網打つ小舟輪を描き	比護賢太郎
嬰泣けば仔牛も鳴いて春のどか	武井 猛	花馬酔木午後の静寂のありにけり	中畑 耕一	豊作の穂麦波打つ上州路	人見 正
残雪の山壁の影青くあり	武井 波真	虫鳴くや五百羅漢の千の耳	中村 敬	自転車を覚えて愉し木の芽晴	平井小枝子
カピバラの気怠き眼春の昼	多胡恵美子	蝌蚪の紐解き明かさるる人ゲノム	中村 百仙	万葉の歌碑に音なき花の雨	平井登志絵
鳥帰る基地も廃炉も置き去りに	田中 公子	春の鴨水尾を崩して睦みけり	中山 幸子	廃鉦の社宅のかまど花馬酔木	平賀敏太郎
寒鯉の重り合うて相ふれず	田中テル子	指切りの約束遠し花菜径	奈良壽美子	花なづな川風に聞く童歌	深澤 美子
お誘ひに二つ返事や花めぐり	田中 玲子	星月夜父の忌日の母の黙	西井 健治	雨粒の明るく太る春隣	藤枝 信雄
童顔になりて草笛吹きにけり	棚沢 悦	夏帽を旅の友とし待つ列車	西尾桃太郎	月の夜は月の色して白椿	藤枝 信雄
囀るや雨後の青空響かせて	玉田 和代	さくら咲く心に翳りなかりけり	西久保キノ	雨上り石段街に石たたき	藤根 豊
調律のピアノの音や目借時	千原 道子	明日のため靴洗う子に春の風	額田 昌安	勤務地に廃校三つ鳥帰る	藤林 正則
天に星地に花萼の盛りかな	塚田 風子	幸せは酢牡蠣喉元過ぐる時	沼田 泥舟	山笑ふみちのく巡るバスの旅	藤平嘉兵衛
春光やひよこの羽根のレモン色	塚本 治彦	石段の空を拡げて夏つばめ	根本 國男	恋猫の思いの丈を鳴き通す	藤森 のり
砂場から覗く銃口水鉄砲	月城 花風	縁側の丸い母の背針供養	野島 巧休	香を焚き雛の一間を灯しけり	渕野 栄子
酒蔵の案内人の息白き	都竹 祥子	月光を一つに集め薄氷	萩原 豊彦	膨らみしせせらぎの音寒明ける	古谷 幸子
十二単少しほつれて享保雛	角田ひろ子	花木五倍子ダム湖にひびく鳥の声	萩原 征恵	鳥帰る茜の空に羽ばたきて	保坂まき子
啓蟄の音階なぞる調律師	角田ひろ子	桜咲く臨時列車の止まる駅	羽立 和子	げんげ田に七つの私立つてゐる	星野久美子
静かさをこぼしつつ連ひらきけり	露木 伸作	春深し大工の耳の小鉛筆	島腹 亨	朝市のブーケのやうなパセリかな	松尾 一子
春宵の鐘の余韻にある愁ひ	寺村しげる	老象が聞耳立ててゐる落花	浜西 修	一步ずつ進む参道淑氣満つ	松岡 孝子
竹林は春の残像持て余し	富田 圭香	柿若葉むかしながらの屋並かな	林 恵美子	虫博士植物博士新学期	松下 浩子
羽繕ふ片眼の軍鶏へ日雷	内藤 増之	玉砂利の音すきとほる寺の秋	原 清香	春の水ひかり溶け込むゆらぎかな	松本 余一

御朱印に墨の香りや山桜	松本 住江	春来る四季ある国の野良仕事	茂木 好夫	湯の町の階段いくつ春の暮	赤見坂伊佐子
数式の躍動春の日の板書	松本みゆき	竜天に昇る絹の香残しつつ	百瀬 ゆみ	毒舌の母は百歳家温し	朝川 晴也
花冷えの己れに匂ふ貼薬	松本八重子	花ミモザ空の扉をひらきけり	百田登起枝	小石でも投げてみようか水温む	安部 朝子
吟行の下見を兼ねて嫁菜摘む	松本由美子	マネキンの歩きだしさう春の闇	百田登起枝	下駄の音響く湯の街秋隣	阿部 利江
靈天の爆音光る演習機	松本 弓子	春耕の土を機影の撫でてゆく	森 可穂	湯けむりに大正ロマンのかげろへる	荒木 正邦
影見えてより初蝶と思ひけり	真鍋マキ子	もみほぐす表情筋に春近し	森 静子	石段をたばしる温泉の香若葉風	石原ふさ子
春の風たつぷり吸い込む螺旋かな	圓山二幸子	満開の花に吸はるるランドセル	森 安千代	体温を寢床に残す春の夢	石原百合子
螢鳥賊己が光に漁らる	丸山 与作	亀鳴くや核の世界の端に住む	矢島 清	前屈の手先四温をとらへけり	伊藤 哲
ポプコーン弾けるごとく臘梅花	万波 照世	石投げて氷柱落せし日の遅刻	藪田 拓司	糲穀の苗床に挿す温度計	稲葉 京閑
下萌やソーラーパネルまた増えて	萬年 和子	狼も兜太もをりぬ山眠る	山口 雄二	国分寺跡藁に雨ぬくし	梅田ひろし
園児らのパステルカラー野に遊ぶ	三浦 和代	作業着のわれに縁なき初芝居	ひーちゃん	目借時脇から落ちた体温計	大成 金吾
新涼や箒目揃ふ寺の庭	三浦 一志	蜜豆を食ふ人生は一度きり	山下 直	温め酒演歌の女にはなれぬ	大野まりな
あや取りの親子の手と手春隣	三喜 万敏	宿下駄の響く伊香保や夏の夕	山田 富朗	恋猫の知りつくしたる温泉街	岡田 春人
色変へぬ松暗黒の海へ向き	南野和歌子	着水の音引きずりて親子鴨	山根 瀧子	万物の息づく生氣水温む	岡村 光博
紙飛行機又宙返り日脚伸ぶ	宮地 昭子	風待ちの夕顔に風来たりけり	山本 いく	石段の温泉街を青嵐	奥山 功
青葉木菟老妓爪弾く本調子	武藤 洋一	色褪せたトロフィーひとつ目借時	吉岡 淘汰	うぐいすの声転がりて陽の温み	尾上 哲
大空の紺を貰ひて桜咲く	村田 郁夫	散る桜今も戦死の兄のこと	吉田 公子	寒暁や零下を示す温度計	勝又 敏智
卒業証書受くる腕のびんと伸び	村田 進子	宿の名の番傘に降る花の雨	吉田 春江	さくら咲く温泉卵割る朝	加藤 清美
露天湯のけふも常連山笑ふ	村橋 克雄	南海の光みやげに初つばめ	若林 佐嗣	夢二描く筆の温もり萩の宿	加藤 孝士
農道の轍の光る薄氷	村橋 克雄	ゆつくりと山が暮れゆく彼岸かな	若林 正人	女将らが元氣湯街の盆踊	金子 笑子
耳鳴りの鬼へ柙挿しひとり	茂木 妃流	ダービーの牝馬軽やかゲート入る	渡邊 俊響	春昼や遠く鎮座の赤城山	金子 禧子
仙果継ぐ轆轤に撥ねて寒の水	茂木 妃流	………題詠「温」………		ひとり身のたつきの水も温みけり	河村 葉子
犬吠えてより間のありぬ春の雷	望月 郁子	つややかな駒の嘶き風温し	赤澤 皆	雨温し陶師泥手のまま語る	北浦 敏子

団鮎川の温度にして放つ 菜の花色の電球とす雛の間 パリコレの縫子の忙し針供養 三寒に被り四温に脱ぐ帽子 湯の町の足湯眠たく花の昼 冬ぬくし上野いつもの匂ひして ロボットに体温らしきもの臍 温度計赤がきれいに伸びて春 甘え来る猫の頭のぬくしかな あたたかや笑顔もどりて六地藏 湯けむりの街に番傘青葉雨 組板のきず目立ちけり水温む ビー玉の沈むつくばい水温む 長長とつかる微温き湯霧の宿 木目込の雛に体温ありにけり たつぷりと乳液試す臍かな 陽光の舐先に躍る春の水 連れ歩く影の三寒四温かな シスターの朝の祈りの四温かな 母の背に軽く指文字水温む 温かき色になりたる榛名山 触らせてもらふ胎動四温晴 温泉に雪の月山眩しめり	木下 涼薫 木原 登 京極和佳子 刑部 宏一 工藤ひろし くにしちあき 蔵田かをり 小橋 辰矢 小林 智子 金 道博 近藤 紅雲 実沢 愛子 佐保田明子 塩谷多鶴子 杉山 加織 鷺見 吉直 関 雅己 曾根新五郎 高畑 半身 瀧澤 照子 竹内 友子 出口 裕興 富樫 桂子	原泉に染まるタオルや夏きざす 木道のつぎはぎ巧み四温晴 朝採りの温室メロン届きをり 句碑巡る温泉街の薄暑かな 秋空や温泉卵売る地獄 首筋に日の温もりや梅白し 水温むきびきび魚のマスゲーム 温泉の町に生るるエレジー春深し 温泉の仲居の摘める山椒の葉 武将碑と並ぶ年尾碑露の秋 朝市やほのあたたかき蓬餅 窯出しの皿の温みや雪解風 長靴を洗ふせせらぎ水温む 道問えば訛り温か諸葛菜 朧夜や白銀の湯に黄金の湯 陽のことば風のことばに水温む 温泉の湯気で洗ふや春の月 温暖化余波かも蝌蚪の蠢けり 麻痺あるも働く右手水温む どの子にもあふるるひかり野に遊ぶ 刺青の藍美しき初湯かな あたたかし祝宴に飲む赤ワイン 花嫁の父への言葉あたたかし	長岡 和恵 西村 英雄 二藤 覺 仁歩久美子 能田 孝昌 乗松 明美 萩原 豊彦 萩原 豊彦 橋本 久子 原田 咲子 張替 和子 阪東 静子 毘舍利愛子 美倉かなな 藤根 豊 星野 裕子 堀田 英夫 牧野美知子 三浦 和代 宮崎旬美子 宮野しゆん 向井 昭子 向井 昭子 向井 昭子	君と行く温泉の宿夢二の忌 皿洗ふ妻は鼻唄水温む 見はるかす榛名群峰水温む 弁当を温めなほす暮の春 温室のトマトにおいのないトマト 連れ立ちて名所廻りや四温晴 晩学のピアノの稽古水温む 手術日の決まる夫や温め酒 生温き缶コーヒーの目借時 温顔の會長多選花の昼 水温むうごめき初めしビオトープ	目黒 輝美 目黒 輝美 茂木 妃流 ひでやん ひーちゃん 山野 節子 山本キヨ子 湯田 畊道 横沢 康良 吉岡 亨 和田 郁江
---	---	---	--	--	---

鴫田 智哉 選

特選

耳鳴りの鬼へ柀挿しひとり 群馬 茂木 妃流

この句の主人公にとって節分の鬼は、長らく自分のなかに宿って去ることのない、耳鳴りなのである。またしても意識に上る、その消えることのない唸りに、なんとかならないかと、柀を挿す。自分だけに聞こえる唸り。柀を挿し、耳を澄ましてもなお、自分がひとりであることを、ありありと感じるのだ。

金魚鉢はなして二つ波静か 滋賀 田中 茂三

人の住む部屋、のなかに或る領域だけを囲んでできた特別な部屋、それが金魚鉢だ。そこに人とは別の世界がある。さて、その金魚鉢が二つ、つまり、金魚どうしにも別の世界があるのだ。でも二つとも、波静か、だという。波の静けさは、二つの空間を超えて共通する、安らぎのようなものではないだろうか。

……題詠「温」……

自転車を立て漕ぎにせり水温む 岡山 高原 晴子

乗ったまま上り坂をのぼりきるために、立漕ぎをする。よし、のぼってしまおう、とそう思った、ちょっとした心の変化。この変化は、春の水のうつろいにごこ繋がついているだろう。「水温むの働きによって空間がやわらかにひろがる。その空間に連動する「立漕ぎ」のからだだが、ほのぼのと浮かびあがる。

秀作

風音を聞くともなしに毛糸編む 静岡 飯野 定子
 口笛も吹き入れたるよ紙風船 群馬 岡庭 浩子
 左手がポケット探す春の雨 京都 藤田 鈴子
 息切れるまで草笛の音探す 群馬 原 清香
 案山子佇つ見なれし父の背広着て 東京 繁山 邑子
 清明やみそ汁の実を掘りに行く 千葉 額田 昌安
 春休みほ乳類みなへそのあり 愛知 伊神 舞子
 節分の前夜の鬼の落ち着かず 千葉 中村 智善
 シンバルの兄がはじめる運動会 埼玉 谷口 哲己
 這い跡の光の先の蚯蚓かな 東京 近藤精一杯
 神だけが知る大根の生産者 福島 前田 善助
 巻き爪を見ているだけの弥生尽 長野 川上 虚承
 いわし雲蹴りつつ帰る空手の子 東京 川崎 和枝
 伊香保にも蚕豆の花こんにちは 鳥根 安食 亨子
 夏来たるニッカボッカの片ピアス 埼玉 高田みづ紀
 近づけば近よつてくる金魚かな 大阪 黒木 淳子
 霜柱畑ぞつくり持ち上がる 群馬 金子 禎子
 パンツにも名前を書いて入園す 兵庫 岸下 庄二
 鯖柄のプリント基板はたた神 北海道 新谷 辰雄
 体育が雪合戦にすぐ変はる 愛知 篠田 篤
 ……題詠「温」……
 陽炎や体温計の電子音 香川 井口 直美
 罔鮎川の温度にして放つ 群馬 木下 涼薫
 とろろんと温たまうどん春休み 沖繩 いじゅ紀美子
 弁当を温めなほす暮の春 愛媛 ひでやん
 組板のきざ目立ちけり水温む 千葉 実沢 愛子

佳作 掲載は氏名五十音順です。

改元の号外走る万愚節	赤羽 克己	菜の花の味噌汁にする今日よき日	伊藤 絃美	かみ合わぬ二人の会話雑を折る	大沼 洋子
梅干の残り少なき寒厨	浅井カツ子	春暁やとぎれとぎれの夢に泣く	今井喜久江	異国語で案内す古都の花電車	岡田 有且
四月来るカナダ土産のカレンダー	浅井カツ子	日溜りに蝌蚪のうごめく神の池	今井 禮子	退院の母を迎へて雪だるま	岡田 邦男
豆を撒くいつもの鳩の来てをりぬ	浅井 敏子	榛名湖は小魚ばかり風光る	今野 龍二	春雷や番号のみの掲示板	岡田 哲郎
舞ひ上がるかもめの脚も春のいろ	浅井 敏子	虫の宿演奏会は午後八時	岩丸 季子	風薫るイラスト入りの招待状	岡田ふじ子
山躑躅伊香保名水ざるうどん	阿部 月子	野は地球天は宇宙よ揚雲雀	植田 一美	褒め言葉人伝に聞き生身魂	岡田ふじ子
スーパリーのちらし広げて日向ぼこ	安部みさ子	雉鳴きて水ゆきわたる棚田かな	内田 歩	汐の香や初荷に倉庫開かれる	岡野未由子
良き日なり紫木蓮には赤ワイン	あまの樹懶	歯並びの父親譲り山笑う	内堀 順子	クレヨンの明るき色や大花野	岡村 光博
てん虫のすつすつははははははははと塀をゆく	有田 徹雄	いちにちをまつ蜘蛛の罫の裏表	内山真理子	滝の音真つ逆さまに落ちてくる	岡本 守史
遠足と遠足出会ふ交差点	飯塚 柚花	ゴールデンウィークや自転車を磨く	内海 恵子	一瞬をとらへて一葉落ちにけり	岡本 守史
襟元に樹樹のざわめき冴返る	池谷 硬司	山ざくら土偶の乳房しんとあり	梅木 俊平	眠る児を夢ごと移す花見莫産	奥村 利夫
電線を掻い潜りゆく燕かな	池田 純子	山ざくら手足で笑ふ赤ん坊	梅木 俊平	春落葉気づけば自問自答して	小野 雅子
息白く吾に追ひつきてくれし友	池田 純子	鏡餅かび取りしたり煮てみたり	榎戸 源茂	仏滅の次は大安地虫出づ	小野 雅子
この空に促されたる更衣	池田 純子	石段を登れば上州風かな	江見 巖	新樹光客に手を振るぐんまちゃん	加藤 楓子
虫が食う辛夷の幹や山笑う	池田 正男	春風や園児の帽子伸び縮み	遠藤 勝久	湯ざめとは野っ原に鳴るオルガン	金子 斐子
向日葵の我に向きたるうれしさよ	石井 俊子	墓石に遊糸まつはりあたりける	大石 昭重	何本も鎌研ぐ兄や水温む	金子日出子
引潮のごとくかき消え雛納め	石橋万喜子	山菜莢と知り幾たびも口遊む	大川 千草	口と頬刺して目刺と亭主売る	加林 悠
山椒の芽ひとつつまめば山匂ふ	石橋 政和	草の名を一つ教はり一つ摘む	大川 千草	顔面でくもの巣を切る庭手入れ	釜谷 徹男
欄干の昆虫模型風光る	市丸万由美	少年は飛び越えたがる春の川	大川 千草	一枚の莫産に一家の花の宴	上内 義則
ヘルメット脱いで汗拭くガードマン	井塚 紫香	酔客も登る神社や後の月	赤羽 光秋	カート押す母の歩幅に木の芽風	川岸 健次
八重桜蕾ふくらむ集会所	伊藤 有	沈丁へ防犯ライト点きにけり	大沼 遊山	春風や高二の二女のえくぼ見ゆ	川崎のぶよ

朝市の声をくぐりて燕来る	河村 葉子	吾亦紅少しひねくれ者の彼	小池 博美	秩父路に春を告げたる川下り	座間 英幸
十人の家族の頃の目刺かな	神田すすむ	桜草並べ 観光案内所	小池 博美	夕焼けに会ひに堤にのぼりけり	座間 英幸
あの人があんな顔して昇く神輿	神戸恵美子	麦刈つて風の見えなくなりけり	小沢 芳治	村中をすぎゆく風も臙にて	澤 長寿
鈴が鳴るまた鈴が鳴る遍路道	菊地 孝也	蛇過ぎる一瞬とその残像と	小沢 芳治	土筆たのし巨木のように子は描く	澤 長寿
潰瘍に届くカメラや水温む	菊池 洋勝	友達の友だちも来てさくらんぼ	小柴 智子	初蝶の影くつきりと野に落し	澤入 郁夫
昭和かと思紛ふやうな牡丹雪	菊地みさ子	風光る補助輪をきよう外します	後藤 明美	卒業歌ビアノの弦の震えかな	澤入 郁夫
苗札も埋れて久しスイトピー	喜多 豊子	木瓜の花烈火の如く咲きにけり	小森 久子	畦塗るや昭和のままにそのままに	椎名 貴寿
陽炎にゆられて通る湖畔馬車	木下 涼薫	自宅兼ビアノ教室つつじ燃ゆ	斎藤 謙歩	茶の花や母の手擦れの糸車	繁山 邑子
手袋の文字が句帳をはみ出しぬ	木下 涼薫	蓮枯れて人のかたちに混みあへり	坂本 正夫	春待つや眠れぬ夜のカンツォーネ	志田 彰子
灯を消して窓いつばいの虫の声	木下 涼薫	裏門に茸の生えて生家跡	坂本 正夫	菜の花や月より淡く陽より濃き	篠原 枕流
ひとけ無きバックネットや寒雀	木俣 道子	うららかや君との帰路は遠回り	佐川 光	火櫛の一輪挿しや白椿	芝田 太
裏木戸のぎしぎし軋む余寒かな	木村こなみ	箭の忽ちむかれ茹でられる	崎田 定雄	滴りも涙も汗もあさみどり	芝田 太
春の空ぐつと引き寄せ逆上がり	木村 律子	木目込の雛に髪の乱れかな	櫻井 詩子	囀や車椅子より子を立たす	柴山 要作
踏青や真つ正面に榛名富士	楠 暢太	もの持たぬひいな指の長さかな	櫻井 八石	発表にしばし黙あり鳥曇り	渋谷貴美子
腰に鳴る熊よけの鈴きのご狩	工藤 進	温泉を飲みて百まで百千鳥	笹岡紀代子	紅梅や一花余熱のごとくあり	島崎多津恵
揚雲雀うしろは円の地平線	工藤 晴美	太鼓橋渡りて新樹光の中	笹岡紀代子	白靴の中敷の文字掠れをり	嶋田 奈緒
農道の標識「生まれ」つくしんぼ	久野 幸俊	鍵盤をゆっくり閉めて卒業す	佐々木亮子	芭蕉像に硬貨あめ玉春の風	島津 スミ
違ふもの食べても家族クロッカス	蔵田かをり	走馬灯まわりつづけて日永かな	佐藤 無風	春風や脚立のうへの図書委員	清水 良郎
春雨に柿の木残る実家跡	倉本 馨	片田舎鶯餅が売れに売れ	佐藤 無風	山笑ふおにぎり三個転がりぬ	山本 奈穂
軒下に柿を飾るやぶらさげて	栗田 史朗	漁労長の塩辛声ののどけしや	佐藤 無風	朝市や婆とりたての茗荷の子	城田 嘉三
たんぼばや二両列車の久留里線	栗山 純臣	啓蟄や鳥追ひかける双眼鏡	佐藤 恒一	生ハムに透けたる微熱春の宵	杉山 加織
つんと立つ深川めしの浅蜷かな	黒崎 舞句	銀やんま鬼押し出しの迷路かな	佐藤 美保	冷蔵庫家族の指定席があり	杉山 太郎
着ぶくれて独り暮しの詰将棋	小池 成功			傘の柄を梅雨寒ひたひたと下る	杉山 太郎

テレビ消しあかりを消して春惜しむ	須崎 輝男	還暦に植ゑし桜の満開や	武市 宣子	残寒やトタンの壁の塾閉づる	中条 護
トーストパンボンッと飛び出た遠い夏	鈴木 昭子	とりどりの野点の膝の春シヨール	竹内 愛子	止まぬ風けふ二つ目の桜餅	中条 護
家中の空気を染めていちご煮る	鈴木登喜和	レガッタの權を翼とそろへ漕ぐ	谷口 哲己	あめんばう色無き空を磨きをり	中根 文子
バス停に父のおもかげ桐の花	鈴木富美子	今聞きしこと今忘れけり冴返る	玉田 和代	陽炎を揺らしてバス二分遅れ	中村 頌子
十九の旅立ち祝ふ雛の夜	鈴木由里子	米粒ほどの文字がびつしり賀状来る	玉田 和代	東屋の外灯点るうかれ猫	鳴滝 暁
薄氷の貼り付いてゐる室外機	関 雅己	もう四日楽しい刻の過ぎやすし	玉田 和代	鼻欠けの男雛の顔の凜として	西浦加賀子
たんぼぼや軍艦島に三輪車	関 美奈子	旨くなれなれよと葱に土かぶせ	玉田 和代	父の日や一升瓶を提げて来し	西川 金治
下校子の黒きマスクや眉細し	関 美奈子	調律のピアノの音や目借時	千原 道子	啓蟄の畔に槌音響きけり	西村 英雄
新若布開ければ地方紙の湿り	関 美奈子	菖蒲湯のお国訛の交じり合ふ	千原 道子	今度こそ紛う方なき初音かな	額田 昌安
携帯を鳴らして捜す春の昼	瀬端 忠男	春光やひよこの羽根のレモン色	塚本 治彦	明日のため靴洗う子に春の風	額田 昌安
二重虹待った待ったとバスを降り	広瀬 元	蟻蝶や歓声で知る追加点	月城 花風	月光を一つに集め薄氷	萩原 豊彦
減量を告げられてゐて青き踏む	曾根新五郎	コースにメタセコイアの芽吹きけり	角田ひろ子	花木五倍子ダム湖にひびく鳥の声	萩原 征恵
もう軒かかざる菊の柩かな	曾根新五郎	啓蟄の音階なぞる調律師	角田ひろ子	豆を撒く夫のうしろに声重ね	波多野富代子
一着の表彰台の水着かな	曾根新五郎	雲かかり勾玉形の春の月	露木 伸作	のどけしや泣かんばかりに笑ふば	晶腹 亨
子も走るお城マラソン梅真白	園田 和子	さへぐりの蓬萊島にはじまれり	露木 伸作	春立ちぬ肘直角の手信号	晶腹 亨
いつまでも見えて白鳥帰りけり	高塚 早苗	東慶寺鶯鳴き交すほつえかな	露木 伸作	春深し大工の耳の小鉛筆	晶腹 亨
毎年よ我に居座る花粉症	高梨 裕	道草の笑ひころげて暖し	寺島 美子	豆飯や七人家族に泊り客	濱田真知子
味の濃き男の料理麦の秋	高橋きよ子	朝の歩を少し延ばして桃の花	寺島 美子	からっ風身を三角にしてペダル	林 明男
空見上げ今日は日曜花ぐもり	高橋みつる	春うらら十円木馬孫も乗り	戸塚 邦子	春水の流れに沿へば影もまた	谷川 治
柀を挿して仕度は調ひぬ	高橋みつる	カフェラテにストローで描く夏の雲	富重 善郎	春の虹東京湾へ消えゆけり	張替 和子
連翹や三三五五の娘らの声	風伸そい子	春風の廃線跡に残るホーム	豊田 民子	石段の風に空蟬二段飛ぶ	久田 正己
カップ麺たべるあいつの春の湯気	滝村 実	新涼や一筆に描く竹の幹	中澤 睦子	西向きの中央口を出て日永	毘舍利愛子
ご自由にと杖置かれあり花の寺	武井 波真	鉛筆を削りし木の香春深し	中島志づ江	ヤッホーと言へばヤッホー山笑ふ	毘舍利道弘

打ちたての鯉鈍光りぬ春の潮	美倉かな	ゴーヤを貰つてからの長ばなし	村田 寛文	白梅や足湯に浸りサリンジャー	麻生 勝行
海鼠踏み天地逆転してをりぬ	深谷 泰子	もみほぐす表情筋に春近し	森 静子	汁粉より温さ伝はる寒稽古	新井 忠彦
棚田打つ吾と鴉の一羽かな	藤田 孝雄	組板に刻む二拍子春キャベツ	矢野 郁江	畑鋤く人影のあり水温む	池田 正男
花虻や蜜にまみれて桂馬飛び	藤田ミチ子	花冷やバター滑らすフライパン	山口美恵子	体温を寢床に残す春の夢	石原百合子
げんげ田に七つの私立つてゐる	星野久美子	二人してひらく卓布や芝青む	山口美恵子	猿楽の翁の舞や水温む	岩上 利一
大魔羅の山の神立つ春祭	北 悠休	着ぶくれて東京駅に降立つや	山口 雄二	今日からは仕事や趣味も水温む	内田 繁男
年用意画鋏の穴にさす画鋏	堀口りつ子	海峡の大橋かすみ島かすむ	山崎 文恵	国分寺跡薬に雨ぬくし	梅田ひろし
湯けむりを口を受くるも春のこと	堀ノ内和夫	げんげ田や橋の下ゆく路線バス	山崎 文恵	子うさぎを抱けば鼓動の温かし	大江洋太郎
筆圧の音迫りくる大試験	本郷巳津子	少年の白きマスクや賞状受く	山田 敏子	水温む蝶のかたちに窓拭けり	大川 千草
山の湯は筍飯の日暮かな	前島 康樹	着水の音引きずりて親子鴨	山根 瀧子	風光る伊香保温泉町の臍地藏	大河原紀子
ひな祭り三人姉妹ほほ杖を	榎本 俊明	お守りのやうに夏炬の火吹竹	山之内喜七	焼きたてのパンの香りや水温む	小島 徹
花辛夷食らふ鳥の眼キヨロリとし	町田 楽人	戦中の土の雛も並べけり	山之内喜七	湯上がりの温泉たまご桜東風	大沼 遊山
朝市のブーケのやうなパセリかな	松尾 一子	笛吹いてあちらこちらに地虫出づ	吉井 薫	花吹雪しずかに鐘をつきにけり	岡本 秀子
一川を覆ひ尽くせる桜かな	松岡 孝子	シャボン玉少女いよいよ立ち上がり	吉田 武夫	「ばあばまたひとりになるね」春の別れ	小野 慶子
胃カメラのシャッター音や花の冷	松澤 澄江	啓蟄の土とは手にもやわらかく	吉積 漫歩	口溶けの温泉たまご初日の出	小濃 勉
花冷えの己れに匂ふ貼葉	松本八重子	石段を上になにと春の月	米倉 信山	うぐいすの声転がりて陽の温み	尾上 哲
灯ともして雛の面に生れる影	真鍋マキ子	猫の眼のきらりと飛んで春の宵	若林 佐嗣	水温むロボットの如我が手足	上嶋 美伊
ツボ刺激してくれさうな松の芯	水野 滋子	ゆつくりと山が暮れゆく彼岸かな	若林 正人	雛の間を温め客人 ^{まろうと} 待ちにけり	上村 篤彦
この春も下書きのまま終りけり	三玉 一郎	朝まだき鶯のこゑ竹林に	渡邊 和子	たつぷりのお湯でねぎらふ餅の白	川口 茂則
潮風に吹かれ上総の雛祭	三津木俊幸	どの背にも光あたるや卒業歌	渡邊 貞夫	うららかやもぐる布団の日の匂い	川村 一重
春寒し一音残るオルゴール	三橋 順子	こけし抱きホームの媪日向ぼこ	渡邊 貞夫	ほの温き榎の肌凭れをり	岸本眞智子
湯めぐりの旅に友ありつばくらめ	武藤 洋一	……………題詠「温」……………		窯出しの壺の温みや四月来る	桐山 甫
吹かれいて蛇の衣の目玉もつ	村上 成子	湯の町の階段いくつ春の暮	赤見坂伊佐子	伏流に日の温みたる犬ふぐり	蔵 堯子

温かい手作り座布団無人駅	源通ゆきみ	百足虫出て温泉街を駈け上り	原せい香	甘酒が氷柱まつりを温くする	矢崎みとめ
温泉の温泉マーク十連休	神戸 千寛	花冷えの右手温む左の手	長島 武彦	寝ねかての小夜の枕や春の雨	矢野 郁江
夜桜や子の温もりを背ナに負ひ	坂 一章	水温む小学校の校歌ふと	中筋のぶ子	水温む引越しの荷はわづかなり	藪田えり子
トマトまでしんなりしたる温サラダ	嶋田 奈緒	牛の乳搾り温もり搾りけり	中村 頌子	春風や牛舎に残る温度計	山口美恵子
水温み歩幅を広くあしたかな	清水 昭八	混成のゲートボールや四温晴	中村 敬	温からん伊香保の人も旅人も	ひーちゃん
木目込の雛に体温ありにけり	杉山 加織	朝採りの温室メロン届きをり	二藤 覺	大葉入れたるお好み焼きの温もりて	ひーちゃん
人として体温のあり花衣	鈴木由里子	秋空や温泉卵売る地獄	能田 孝昌	大寒に届く入選作品集	ひーちゃん
徳利も猪口も手造り温め酒	諏訪美和子	洗ひ場に起こる爆笑水温む	萩原 豊彦	温顔の家族集り山笑ふ	山本しげを
あたたかき人の形見のあたたかし	曾根新五郎	水温む小川にわたす丸木橋	橋本 久子	検温の時間や窓に小鳥来る	山本 則男
連れ歩く影の三寒四温かな	曾根新五郎	どら猫の目の色ぬくし土手の昼	濱名 博光	わざぐれに書きたる墨のあたたかし	雪下 純子
大寒の黒き温泉卵かな	曾根新五郎	長靴を洗ふせせらぎ水温む	毘舍利愛子	耕して来しコーヒーを温める	吉田 武夫
水温む利根に煌めく渡し舟	高野 富男	旅のどか四本浸る足湯かな	毘舍利道弘	たまさかに温州蜜柑の香をまどふ	若林 正人
桜もち買へばレシート桜色	武井 猛	挨拶の言葉のぬくし桃の花	平地美代子		
水温む渡船で通ふ一年生	武市 良博	三月の祖父母の眼うるみけり	福士 謙二		
温かき色になりたる榛名山	竹内 友子	挨拶の訛りと訛りあたたかし	福田 隆		
春旋風温泉付の家を売る	田生 弘子	白壁に光が差して水温む	保坂まき子		
水温む川のほとりで鎌を研ぐ	館野 茂子	包まれる手の中の手の温かさ	保坂まき子		
あたたかや八人乗りの乳母車	田中 公子	物語り一羽の鳥は温かく	保坂まき子		
爽やかや温もりのある丸き声	田中 俊	鉛筆をけずる刃の音あたたかし	松木 溪子		
春日差すちんちん電車の木の温み	田中由紀子	温かくなれば二人の約束も	松下 乃湖		
病室に花びらひらり体温計	田中 洋子	温もりの残る握手や虹かかる	松山 真弓		
やうやくに思ひ出したる吾亦紅	田中 玲子	温泉の熱きを好み草の餅	村田 郁夫		
温め酒置くや指先耳に当て	田辺 国和	鼻に来し蛍の光り温かし	守安 雄介		

西村 和子 選

特選

今年又飾らぬままの古雛

群馬 佐々木 美恵子

雛の句は大方「雛飾る」か「雛納め」あるいは眼前に飾られた雛を詠むことが多い。しかしこの句は飾られないまま家のどこかにしまわれている雛を詠んでいる。いかなる事情があるのか想像が広がってゆく。今年も飾られぬままだが、かつての記憶はあり、その存在を決して忘れてはいないのである。

葉桜となつて都会にまぎれけり

茨城 神谷 たくみ

桜の花が葉桜になったということは、華やかに目立つ美しい存在から、人目を引かぬ目立たぬ存在になったということ。都会の光景に組み入れられて、日常の変哲もない木立になったということだ。桜の変化を表している句だが、新人が都会人になってゆく人間の変質をも思わせる表現に惹かれた。

……題詠「温」……

うららかや街に湯の道人の道

埼玉 平井 萌 黎

どこの温泉街にも見られる光景だが、源泉から各宿に湯を導く大切な道、湯の道は地下を走っている。時々湯けむりを上げているので、その道のありかがわかる。それとは別に人々が行きやすいように道はできている。ある時はそれが交叉したり平行したり。季語は湯の街の調和を語っている。

秀作

木々芽吹く坐つてなんかゝるれない
友達の友だちも来てさくらんぼ
心ふと遠く置くととき梅匂ふ
見渡せど見渡せど山ほととぎす
揺るるたび数が増ゆるや紅牡丹
釣り人の退屈さうな秋の川
舞ひ上がるかもめの脚も春のいろ
棟梁の鼻歌聞こゆ春の昼
根上りの松へと桜吹雪かな
酒蔵の案内人の息白き
湖も色づく頃や草青む
風止んで花の色濃き夕かな
金星をぐいと引き寄せ春の月
流れ行く川にとどまる春の月
濡れて濃き逢魔が時の百日紅
まどかなる飛沫や春の噴水は
もの持たぬひいなさの指の長さかな
寒鯉の重り合うて相ふれず
飛び立つと見えて羽干す海鷗かな
吟行の下見を兼ねて嫁菜摘む

……題詠「温」……

温泉の噴気に蒸され桜鯛
窯出しの皿の温みや雪解風
ビー玉の沈むつくばい水温む
徳利も猪口も手造り温め酒
春夕焼温み残れる砂団子

千葉 相原 一枝
兵庫 小柴 智子
愛知 神谷 鋭子
千葉 毘舍利愛子
埼玉 関根 瞬泡
徳島 山野 節子
神奈川 浅井 敏子
愛媛 横山由加子
富山 中沖 正之
岐阜 都竹 祥子
群馬 川浦 克彦
東京 清水 洋
長野 平林 佳治
滋賀 馬場 弘子
東京 曾根新五郎
熊本 あまの樹懶
新潟 櫻井 八石
秋田 田中テル子
愛知 西村 愛美
東京 松本由美子

大分 房前和加子
群馬 阪東 静子
兵庫 佐保田明子
鳥取 諏訪美和子
群馬 小林 洋子

▼佳作▼ 掲載は氏名五十音順です。

地吹雪や牧に明治の開拓碑	阿久津勝利	永き日をあまさず使ひ畑仕事	磯貝 晴子	柏汁を啜り酒の名尋ねけり	大島 幸男
朝に摘み夕餉に添ふる土筆かな	朝川 晴也	弥次郎兵衛かすかにゆらす隙間風	磯貝 晴子	励まさぬことが励まし冬銀河	太田 喜子
谷底を割つて現る雪解川	安部 朝子	悪友の如くに蜥蜴薄目あく	伊藤 孝一	とどまらぬ蛙軍の月夜かな	大成 金吾
微の香や太き柱の映画館	安部じゅん	軍神の出でし郷なり山桜	稲井 夏灯	裏山の初音に目覚む旅の宿	大平 政弘
石積みの森の教会風光る	阿部ひで希	花おぼろ山の一角蕩けたる	井上 宣孝	春眠しオーケストラの音合はせ	岡 まゆみ
薄氷や日のうすきまま暮れてゆき	安部川 翔	よき人との出会ひの予感沈丁花	井上 昌子	大利根の源流はるか鳥帰る	岡崎 昌子
春シヨール時に甘えてみたき日も	安部川 翔	うららかや縁切り寺に恋みくじ	今野 龍二	堤吹く風やわらかしつづみ草	岡崎 昌子
筆文字のはらひ麗し花の昼	新井あぐり	買初の葉書へ三句記しけり	岩田 勝	地の怒り鎮めて枝垂桜かな	岡田 邦男
新雪を得て残雪の甦る	荒井 古鷹	せせらぎの音そへられて夏料理	岩野 記代	うそに泣きうそに笑ひて初芝居	岡田 邦男
とめどなき落花の中にて寂し	荒木 信夫	ちちははの影やはらかき春障子	上籠のり子	枝揺れて百花囁く糸桜	岡田 敏彦
蹴つて水輪止まつて水輪あめんぼう	飯塚 柚花	春雨や大地脹らむ音のして	上田 雅子	風薫るイラスト入りの招待状	岡田ふじ子
風音を聞くともしに毛糸編む	飯野 定子	雉鳴きて水ゆきわたる棚田かな	内田 歩	鐘の音の余韻の起伏花の冷	岡本 秀子
星空を見飽くことなし避寒宿	飯野 定子	山ざくら手足で笑ふ赤ん坊	梅木 俊平	滝の音真つ逆さまに落ちてくる	岡本 守史
咲き満ちてなほも余白の冬桜	池澤 光子	秋耕やまた植える苗考えつ	榎戸 源茂	紫陽花の青より青き今日の空	奥中 和子
啓蟄の土蹴り上げて兎ら走る	池田 紫艶	畦道の右も左も犬ふぐり	遠藤 操	睡蓮や羽化するごとく開きたり	奥村 利夫
凍蝶や祈る形に羽根畳み	池田 純子	書けさうで書けない漢字臘月	大石 昭重	巡りては仲間呼びあい鳥帰る	小野 祐子
人知らぬ空の深さを鳥帰る	池田 純子	どの道を行くも灯台花菜風	大川 千草	春浅し梢の鳥の琥珀色	柏瀬眞理子
歩むほど心ほぐるる木の芽風	石川 賢吾	花みづきまた出先にて傘を買ふ	大久保一彦	音はみな花に吸われてゆくような	加藤 順子
マチユピチュの岩塩添える鮎料理	石戸 幸子	ほととぎす一気に空気軽くなる	大坂 和子	何本も鎌研ぐ兄や水温む	金子日出子
青き踏む一途に行けばそれが道	石橋 政和	山も野も川も麗し鳥帰る	大沢 綾子	樹下に咲く実生二輪の白椿	金子 佳子
深夜まで点る工房春隣	石原 良彦	谷に沿ふ旧街道や山桜	大島 幸男	霜柱畑ぞつくり持ち上がる	金子 禎子

雨ごとに膨らむ実梅光りをり	狩野 玲子	澄む秋やゆつくり回る観覧車	小林 美峰	ポケットに飴玉ふたつあたたかし	白井 晟也
おくやまに辛夷の花の白さやか	上村 ハル	折鶴の飛びたるごとし銀杏散る	小山真知子	忙し気な野鍛治の音や辛夷咲く	白鳥 寛山
放流の鮎に漲る力かな	河合 幸子	大窓に富士を取めてあさり汁	斎藤 詳次	鼻緒締め直し宵越し踊かな	城山 憲三
いわし雲蹴りつつ帰る空手の子	川崎 和枝	小鳥来る高野の廟の明るさに	斎藤 詳次	ひつそりと生きてゆきたし稲の花	菅野 公子
やはらかな雨にももの芽揃ひけり	川崎 雪華	漬物と走り茶村の美容室	坂口 智弘	傘の柄を梅雨寒ひたひたと下る	杉山 太郎
遊ぶ子の影やはらかく水温む	河田 公枝	人波に紛るる喪服冬茜	櫻井 詩子	地下足袋でさぐる筈朝ほらけ	鈴木きよえ
朝市の声をくぐりて燕来る	河村 葉子	地の力吸ひ上げ尽くし曼珠沙華	櫻井 八石	絡繰の人形運ぶ新茶かな	鈴木 武
パンツにも名前を書いて入園す	岸下 庄二	白木蓮ほぐれんとして光りをり	佐藤育久子	家中の空気を染めていちご煮る	鈴木登喜和
春近し小箱に残る母の文字	申田ハルミ	漁労長の塩辛声ののどけしや	佐藤 無風	バス停に父のおもかけ桐の花	鈴木富美子
切株の魚籠動きたる山笑ふ	久保田敏子	黒々と道を残して春の雪	佐藤 正博	一山のざわめきやまず春疾風	鈴木 雅子
花おぼろ宝塔の影ふくらめり	蔵 堯子	夕焼けに会ひに堤にのぼりけり	座間 英幸	分校のなくなる噂桐の花	鈴木 正子
話まだつきぬふたりや夕桜	蔵田 園子	初蝶の影くつきりと野に落し	澤入 郁夫	迷ふこと楽しんでゐる蝻の道	鈴木美恵子
近づけば近よつてくる金魚かな	黒木 淳子	恋猫やおおう逢おうと夜もすがら	塩川 薫	無位無冠気楽極楽大朝寝	角 雅行
つんと立つ深川めしの浅蜷かな	黒崎 舞句	源泉は伏流水や花山葵	塩川 隆三	夜桜や無量の水のざわめきぬ	鷺見 吉直
はこべらや納屋に仕舞ひし子の机	黒崎 舞句	膝小さくたたみて母は毛糸編む	繁定 操陽	たんぼぼや軍艦島に三輪車	関 美奈子
着ぶくれて独り暮しの詰将棋	小池 成功	クロツカス昔の記憶はつきりと	四島 幸子	夏草や駅の外れの転車台	関根 勇
吾亦紅少しひねくれ者の彼	小池 博美	表札は未だ夫の名燕くる	篠原 弘子	モンゴルの塩は桃色つちふれり	関矢 好枝
桜草並べ 観光案内所	小池 博美	春の雷思わず背筋伸びにけり	篠原 正明	犬ふぐり空へ向かひて笑ひけり	瀬端 忠男
人間の見物に来る蛍かな	神戸 千寛	滴りも涙も汗もあさみどり	芝田 太	出征の旗を日に干す彼岸かな	高崎 雅明
無患子の実のゆさゆさと日の永し	兎玉 君子	梅東風やかたかたと鳴る恋の絵馬	柴山 要作	味の濃き男の料理麦の秋	高橋きよ子
万葉のこころを今に梅ひらく	後藤 良一	重たげに風を諾う桜かな	清水 洋	想い出は褪せることなし桜貝	高橋 トシ
殺生の厨を出づるさくららどき	小西 瞬夏	着ぶくれて手元不如意となりにけり	志村 美好	膝毛布かけ礼拝の末席に	高畑 半身
二秒ずつ進む秒針春の昼	小橋 辰矢	花いかだ都をめざし流れゆく	勝屋風奈美	あぢさゐに触れてもの干す朝かな	高原 晴子

鹿の仔やすでに野に住む顔をして	武井 猛	あれそれで事足る暮し春隣	永井 陽子	箒目の道に一輪落椿	濱名 博光
白魚の蠢く光掬ひけり	武市 良博	美しく立山晴れて卒業す	中沖 正之	春の日や京より届く金平糖	林 恵美子
うつぶんを蹴つて飛ばして風光る	武田 ミツ	サンガラスとり参観の母となる	中澤 安子	拍手わく切紙細工菊日和	原 かつ代
故郷の空美しき彼岸かな	田島 貞子	読みさしの文庫に挟む初紅葉	中澤 泰三	立ち止まること許されず蟻の列	原 清香
わびしさや雪の中なる一軒屋	田島 貞子	鎮もれる寺領に仄と赤椿	中島志づ江	息切れるまで草笛の音探す	原 清香
おもむろに膨らむ地球春時雨	館野 茂子	利根川の水音高し柳の芽	中島 秀雄	栗剥いて母の話に及びけり	原田 咲子
山間の段々畑揚雲雀	田所 咲子	虫鳴くや五百羅漢の千の耳	中村 敬	峠より見下ろす里の梅真白	原田 純一
鳥帰る基地も廃炉も置き去りに	田中 公子	目印は注連張りし岩磯菜摘み	中本きみよ	春の虹東京湾へ消えゆけり	張替 和子
黎明に白む淡墨桜かな	田中 左海	糸柳川面に影のゆらぎけり	中山 幸子	殉教の島より来たる小鳥かな	深沢 頼子
日記には迷へる心夜半の春	田中 基之	冬茜山の嶺線くつきりと	中山 武子	美しくやがて淋しき村の秋	福土 謙二
晩春や波ゆるくなり丸くなり	田中 洋子	との曇るひと日を寒の戻りかな	西村 斗潮	あらはなる天守の礎石螢草	福田 隆
夕暮の風に靡きし梅の花	田野咲美子	春の雷天地一喝するごとく	西本美弥子	湖の色に暮れけり冬の山	藤枝 信雄
いつになく夫の饒舌茸飯	玉田 和代	サクスの調べなつかし花の下	仁歩久美子	月の夜は月の色して白椿	藤枝 信雄
抱っこして子を諭しをり桜草	玉田 和代	清明やみそ汁の実を掘りに行く	額田 昌安	残雪の飛沫の高き車道かな	藤嶋 彰子
麦青むゆらゆら風をいなしつつ	玉田 和代	幸せは酢牡蠣喉元過ぐる時	沼田 泥舟	宇野千代の生き方が好き冬桜	渕野 栄子
妹の手を取りて横断冬うらら	玉田 和代	引くときも光を残す春の波	能田 孝昌	初蝶や波打つように飛び廻る	渕野 栄子
たまさかの子守は楽し紙風船	玉田 和代	早春やなんと空気が軟らかい	野村 瑠以	膨らみしせせらぎの音寒明ける	古谷 幸子
台地割く久遠の流れ百千鳥	地田 修一	説法を聞いて出づれば涅槃雪	乗松 明美	客席に春の日乗せて路線バス	本多 幸子
窓越しの緑あふるる夏館	千葉 美森	月光を一つに集め薄氷	萩原 豊彦	芒原分け入れれば一陣の風	町田 朱美
万物の色消えにけり春の雪	千原 道子	花木五倍子ダム湖にひびく鳥の声	萩原 征恵	見上げれば一枝ごとに寒雀	松浦知恵子
雪を掻く薄墨色の空見上げ	都竹 祥子	万緑をつなぎ朱の橋輝けり	橋本世紀男	朝市のブーケのやうなパセリかな	松尾 一子
休田も千の棚田も春の水	出口 裕興	秋高し水天一碧日本海	畠山 道雄	散る花のひとつひらごとの光かな	松本 余一
何食はぬ顔して帰る女正月	栃尾 智子	こつとんと信濃の春ははじまりぬ	服部 正	笹鳴きやまだ調はぬ旅仕度	松本 余一

裏窓を開けて青葉の風通す	松本 余一	五月闇耳を掠める鳥二羽	守安 雄介	湯の町の階段いくつ春の暮	赤見坂伊佐子
オリブの葉裏きらめく春の鳥	松本 余一	日の丸を揚ぐるタンカーうららけし	ひでやん	出流れの湯に温まる薬の日	安食 亨子
きざらぎの日だまりはまだよそよそし	松本みゆき	雪踏みて山に入れば暖かし	山岸 弘明	小石でも投げてみようか水温む	安部 朝子
いぬふぐり母は生涯上総弁	松本 祐一	花冷やバター滑らすフライパン	山口美恵子	畑打つ土の温もり楽しみつ	新井 和生
アマリス聞き流すこと覚えけり	松山 真弓	虫喰いのほうれん草の甘いこと	ひーちゃん	声はづむ集団登校水温む	安在 宗風
影見えてより初蝶と思ひけり	真鍋マキ子	ビル街に沈む名跡冬の草	山田 一三	温顔の夫を偲べば小鳥来る	飯野 定子
工場のベル鳴り渡る四月かな	三浦 和代	東京に馴染めぬ母や豆の花	山中 節子	水温む猫の肉球いや弾み	板津 松男
初轍はためく音に招かるる	三浦 一志	自在鉤外し夏炬となりけり	山之内喜七	石橋に鍔絵の里や水温む	井上 敏子
潮風に吹かれ上総の雛祭	三津木俊幸	お守りのやうに夏炬の火吹竹	山之内喜七	水温む日の射す方へ鯉寄り来	内堀 順子
色変へぬ松暗黒の海へ向き	南野和歌子	不細工な金魚高値で売られをり	山本 則男	時々は俳句をつくる四温かな	内海 恵子
春めくや退院の日の近づきぬ	宮坂美恵子	地下鉄の通路に潜む余寒かな	吉井美代子	水温むのんびり走る新幹線	梅澤 実
かたくりやかかつては袖の遥拝所	宮崎 尚範	軍歌とて時には挽歌花の冷え	吉岡 亨	畦道に人影増えて水温む	大西 國子
この川にきつと棲む筈山椒魚	宮坪 勝美	春暁の雨の気配にまどろみぬ	吉川 元二	花吹雪しずかに鐘をつきにけり	岡本 秀子
虎杖の花ちちははの墓たたむ	宮坪 勝美	托鉢の大師の像に落花かな	吉澤 章子	猫の子を撫でて手のひら温める	子安 桃子
農道をバイク疾走鳥帰る	村田 浩	宿の名の番傘に降る花の雨	吉田 春江	懐のどら焼温し梅雨寒し	片桐傳一郎
料峭の瞳窄めるカメレオン	村田 淑子	親燕愛し愛しと子の口へ	吉原美代子	家苞の饅頭温し花吹雪	加藤 梅夫
石一つひとつの形冬の水	村橋 克雄	モダンジャズ流るる先に苗木市	米田 陽子	雛の間を温め客人 ^{まろうと} 待ちにけり	上村 篤彦
手作りのケーキも焼いて雛の宴	目黒 輝美	猫の眼のきらりと飛んで春の宵	若林 佐嗣	温かや赤子の手足よく動く	神田すすむ
水仙や見送ることの多き駅	持田 敏朗	沢の音森の声聴くキャンプの子	若林 正人	集落はただ三戸なり水温む	菊地 孝也
時空にも歪みあるらん鳥雲に	百田登起枝	鴟たける崩れしままの窯の跡	和田 郁江	相席の嬰よく笑ふ四温晴	岸下 庄二
異次元へ行けさうな橋春しぐれ	百田登起枝	蒼天に風のみちあり鳥帰る	渡辺 倫子	ドアノブにかける伝言水温む	北原かおり
狎を曳く官女も揃ふ古代雛	森 靖子	………題詠「温」………		ゆく雲と話す人をりあたたかし	木原 登
摘みし手に残る香りやふきのたう	森田 英子	………		冬ぬくし上野いつもの匂ひして	くにしちあき

橋詰に猫のたまり場水温む	國司 正夫	水温む小学校の校歌ふと	中筋のぶ子	減反を解かれし田の面水温む	宮崎 清美
耕せば土の息する温みかな	久保田嘉博	鳥どものそぞろ忙しき水温む	難波美枝子	あたたかや眼下に広がる瀬戸の海	村田 進子
ていねいに卵割る朝水温む	香山 直子	叢に鳥のさざめき冬あたたか	西川 順子	見はるかす榛名群峰水温む	茂木 妃流
文明を繕く大河水温む	小柴 智子	木道のつぎはぎ巧み四温晴	西村 英雄	あたたかや鳶の輪二つ重なりて	森 可穂
俎板のきず目立ちけり水温む	実沢 愛子	句碑巡る温泉街の薄暑かな	仁歩久美子	この町は終の住処や水温む	八幡 能江
恩を謝し恨を忘れ温かし	澤 長寿	開かれし温室の窓春兆す	能田 孝昌	水温む引越しの荷はわづかなり	藪田えり子
あたたかや白壁つづく路地を行く	澤田 れい	首筋に日の温もりや梅白し	乗松 明美	春風や牛舎に残る温度計	山口美恵子
温かき風は日ごとに露の臺	重富美津恵	洗ひ場に起こる爆笑水温む	萩原 豊彦	晩学のピアノの稽古水温む	山本キヨ子
木目込の雛に体温ありにけり	杉山 加織	掌にすれば妣の温もり古雛	萩原 豊彦	四温晴テラスに母の車椅子	吉井美代子
日溜りの田水盛り上げ蝌蚪生る	鈴木きよえ	水温む膝の痛みもやや薄れ	橋爪ひさ子	山川の光返して水温む	米田 陽子
父よりも兄よりも生く温め酒	瀬端 忠男	水温む小川にわたす丸木橋	橋本 久子	温め酒津軽訛りのなめらかに	綿引多美子
大寒の黒き温泉卵かな	曾根新五郎	朝市やほのあたたかき蓬餅	張替 和子		
水温む利根に煌めく渡し舟	高野 富男	止まり木にふるさと訛り温め酒	春山 武雄		
温室のガラスの曇り寒の入り	風伸そい子	ベビーカーに元気な手足あたたかし	毘舍利愛子		
湯の町の湯気あがる川冬温し	田島多美子	道問えば訛り温か諸葛菜	美倉かな		
あたたかや八人乗りの乳母車	田中 公子	朧夜や白銀 <small>しろがね</small> の湯に黄金 <small>こがね</small> の湯	藤根 豊		
陸奥の西方浄土水温む	田中テル子	白壁に光が差して水温む	保坂まき子		
鼻歌をうたひつつ家事水温む	玉田 和代	おしゃべりは百薬の長四温晴	堀毛美代子		
検温に始まる一日門桜	田村フミ江	腰おろす土手の温もり露のとう	本多 幸子		
触らせてもらふ胎動四温晴	出口 裕興	仏にも温め酒を振舞ひぬ	前島 康樹		
畑に出てつい長話水温む	寺村しげる	鉛筆をけずる刃の音あたたかし	松木 溪子		
百足虫出て温泉街を駈け上り	原 せい香	白鷺の影も乱さず水温む	三上 通而		
水温む伊香保の街の薄明り	中島 秀雄	温かきお茶も勧めて植木市	右田 捷明		

令和元年度
NHK学園生涯学習フェスティバル
伊香保俳句大会
入選作品集

令和元年六月二十六日発行

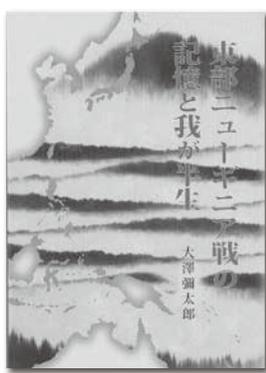
編集
発行
NHK学園

〒一八六一八〇〇一
東京都国立市富士見台二丁目三六―二
電話 〇四一五七二二三二五二代

印刷
明誠企画株式会社

作品集の作成にあたっては、あきらかな誤字・脱字
以外は、原作のまま掲載いたしました。
誤植など不備な点がございましたらお許しください。
また落丁本はお取り替えいたします。

あなたの学びを 「本」にまとめて みませんか



日々の出来事や想いを詠んだ俳句や短歌を

一冊にまとめてみたい。

あなたの人生と大切な作品を

一冊の本にしてみませんか。

NHK学園の 自費出版



学習の成果を1冊に

人生の節目に本を出版される方が増えています。自分のための1冊、家族に贈る1冊。お手元の学習リポートがそのまま原稿になります。

NHK学園の講師がサポート

各分野の講師があなたの本作りをサポートいたします。添削はもちろん、構成やレイアウトもお任せください。跋文も書き添えます。

ご相談・お見積もりは随時

思い立ったら是非一度ご相談ください。学園宛に原稿をご送付いただければ無料でお見積もりもいたします。

合同作品集

全国の仲間とともに一冊の本を仕上げる楽しさが味わえる合同作品集。合同歌集「さくら」、合同句集「くにたち」、川柳合同句集「ふじみ」、「昭和・平成の時代を生きて」など特定のテーマに沿って文章を綴る企画作品集。

俳句、短歌、自分史、エッセイ、アート、絵手紙、書道、写真など、学習の成果を自費出版される方を全面的にバックアップいたします。

2019 出版個別相談会(参加費無料・予約制)

開催日	開催地	会場
2019年2/15(金)	姫路	ホテル姫路プラザ
3/15(金)	名古屋	キャスルプラザ
4/5(金)	東京・市ヶ谷	アルカディア市ヶ谷
4/19(金)	水戸	水戸三の丸ホテル
5/23(木)	高松	高松シティホテル
5/24(金)	高知	高知サンライズホテル
6/20(木)	福岡・天神	アークロイヤルホテル福岡天神
6/21(金)	宮崎	エアラインホテル
7/26(金)	新潟	アートホテル新潟駅前

開催日	開催地	会場
8/22(木)	福島市	ホテル福島グリーンパレス
8/23(金)	青森	ホテルJALシティ青森
9/13(金)	東京・市ヶ谷	アルカディア市ヶ谷
9/27(金)	甲府	ホテルクラウンヒルズ甲府
10/25(金)	金沢	ホテル金沢
11/14(木)	京都	メルパルク京都
11/15(金)	和歌山	シティイン和歌山
12/13(金)	小田原	小田原お堀端コンベンションホール

*相談会にご参加できない方で、原稿をお持ちの方は別途ご連絡ください。場合によっては直接伺います。

下記の時間枠を設定、先着順ですでお早めにご予約ください。

①10:30～11:30 ②11:30～12:30 ③13:30～14:30 ④14:30～15:30

- 予約制ですので、ご希望の開催地・時間枠をご連絡ください。
- 会場にご来場できない方、遠方にお住まいの方は、お電話やお手紙にて承ります。
- NHK学園本校(東京・国立市)では個別相談を随時行っております。事前にご予約ください。

原稿は揃っていないなくても大丈夫! まずはご相談ください。出版アドバイザーがていねいにご説明します。

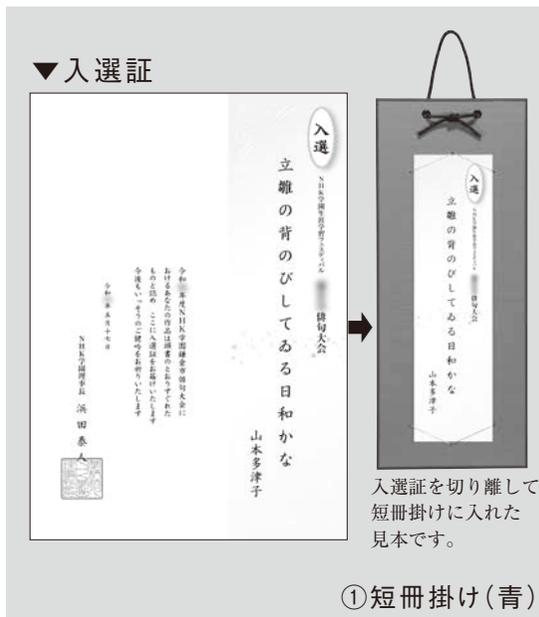
お問合せ NHK学園 自費出版係 ☎042-572-3151(代) FAX 042-572-0061

NHK学園 伊香保俳句大会 入選証他専用額・トロフィーのご案内

「伊香保俳句大会」ご入選おめでとうございます。ご入選の記念にいかがでしょうか。

《入選証》 1通 1,500 円

- * A4判（297×80 ミリ）でお届けします。
- * 切り離して短冊にすることが出来ます。
- * おおむね1か月でお届けします。



《専用額》

- ①短冊掛け（青）
材質は和紙、壁掛け用です。
1枚 1,500 円（税・送料込）
- ②額（クラシックゴールド）
上品なデザインで卓上・壁掛け両用です。
1枚 2,500 円（税・送料込）



《トロフィー》

- 作品をトロフィーにお彫りいたします。
1つ 13,000 円（税・送料込）
- * 専用申込書をお送りください。郵便局からの払込票をお届けします。
ご入金確認後からお作り始めます。お届けまでに1か月ほどかかります。

キ.....リ.....ト.....リ.....

令和元年度 NHK学園 伊香保俳句大会 トロフィー専用申込書

ご住所 〒 -

お名前 _____ 電話番号 _____

掲載P	選者名	賞名	作品（全文を記入してください）	数	金額

お申し込み方法 ①または②をお選び下さい。

①定額小為替の場合

下の申込書に必要事項を記入し、定額小為替（郵便局で購入）を同封して、封書でお申し込みください。

※定額小為替には、何も書かないで下さい。

②郵便振替の場合（払込取扱票そのものが申込書になります）

郵便局で取り扱っている払込取扱票の通信欄に（1）大会名、（2）作品の掲載ページと作品全文、（3）枚数、（4）選者名（希望の方のみ）、（5）賞名、また短冊掛け・専用額を希望の場合には（6）商品名、（7）数量を必ず明記してください。金額欄に合計金額を明記して、下記の口座へお振り込みください。

入選証および専用額トロフィーの
申込先・連絡先
〒186-8001（住所記入不要）

NHK学園教材サービス
伊香保俳句大会入選証係
TEL 042-572-3151（代）

← 切り取って
封書のあて名に
してください

<郵便振替の専用口座>

口座記号番号													
0	0	1	9	0	7			5	6	3	6	0	8
加入者名		NHK学園 教材サービス											

- ※ いったんお申し込みいただいた後のご返金はいたしかねますので、ご了承ください。
- ※ 過去の地方大会の入選証については、平成11年度以降のものに限ります。
- ※ 郵便振替の場合、下の申込書及び振替払込受領証のご郵送は必要ありません。
- ※ 申込書にはお名前、ご住所、電話番号をお忘れのないようお願いします。

定額小為替専用

令和元年度

NHK学園伊香保俳句大会

入選証および専用額申込書

名前	フリガナ	受講者番号											
住所	〒												
電話番号	-												

○入選証

掲載誌ページ	選者名 (希望の方のみ)	賞名	作品（全文を記入してください）	単価（1枚）	枚数	金額
				1,500円		
				1,500円		
				1,500円		

- ◆特選・秀作・佳作の作品には希望される方のみ、選者名が印字されます。
- ◆同じ句を複数の選者から選ばれた場合は、選者別の発行（1選者1枚）になります。ご希望の選者名を明記してください。
4枚以上希望される場合にはお手数ですがコピーをしてご記入ください。

○専用額 ※ 専用額には入選証は含まれません。

短冊掛け（青）	数量	1,500円×	枚	金額	
額・クラシックゴールド	数量	2,500円×	枚	金額	

合計金額 _____ 円 を定額小為替で同封します。

※ 振り込みの場合は、この用紙のご郵送は必要ありません。

実作力アップコース

名句で学ぶ！

表現の幅を広げたい方に

俳句 表現のコツ

- リフレイン、押韻、オノマトペ、一物仕立など、俳句の表現テクニックや効果を学びます。今まで知らずに使っていた表現方法やより効果的な使い方を再確認することで、表現の幅はぐんと広がります。
- レポート課題は3回。各レポートには作句課題がありますので、テキストで学んだ知識が実作で使えているか確認できます。

上級者のためのコース

俳句倶楽部

- 俳壇の第一線で活躍中の講師によるワンポイント・アドバイスと、会員同士の誌上句会を楽しむ、俳句上級者のためのコースです。大会や雑誌の投句で、より上位の賞を目指す方におすすめです。

ワンポイント・
アドバイスが
受けられます

ワンポイントアドバイス講師
(2019年5月)



井上康明
「郭公」



岩岡中正
「阿蘇」



片山由美子
「香雨」



小浜杜子男



高野ムツオ
「小熊座」



寺井谷子
「自鳴鐘」



西村和子
「知音」



三村純也
「山茶花」

- 受講期間1年(自動継続)
- レポート提出9回(ワンポイント・アドバイス投句5句×4回、誌上句会 投句2回、互選2回、コンクール1回)

教材

レポートセット
〈別送〉機関誌(4冊)
「誌上句会 投句集」・「誌上句会 作品集」(各2冊)

◆「俳句倶楽部」の特徴

レポート

- ・ワンポイント・アドバイスは全4回(1回につき、自由題5句提出)
 - ・あなたの提出作品に、俳壇で活躍中の著名な実力派俳人が一言アドバイス。
 - ・希望の講師を選べます。
- ※各講師には定員があります。一定数を超えた場合、ご希望の講師のアドバイスを受けられないことがあります。

誌上句会

- ・誌上で「句会」を楽しみます。
- ・会員の自選作品を掲載した作品一覧から2句選び(互選)、高得点の作品を作品集で発表します。

コンクール

- ・年1回のコンクールは「俳句倶楽部」会員同士で腕を競います。全投句作品が作品集に掲載されます。

有馬朗人、宇多喜代子、大串 章、
コンクール選者 黒田杏子、鷹羽狩行、深見けん二、
星野 椿、宮坂静生

講座の詳しい案内パンフレットを無料でお送りします。



0120-06-8881 FAX042-574-1006

〒186-8001 東京都国立市富士見台 2-36-2 NHK学園 6B05 係
ホームページ <http://www.n-gaku.jp/life>



参加者募集中! NHK学園 学習の旅

大人の東京俳句散歩 ～秋の季語「相撲」を詠む～

令和元年9月17日(火)～18日(水) (1泊2日)

訪問先 東京都墨田区(両国国技館ほか)

同行講師 宇多喜代子



「東京の四季を楽しむ」がテーマの俳句の旅です。宇多喜代子先生とともに、両国国技館で行われる大相撲9月場所を観戦し、秋の季語「相撲」を詠みます。力士同士がぶつかり合う迫力のひとときを楽しみ、俳句に詠みましょう。



同行講師
宇多喜代子

「草樹」会員代表 NHK学園俳句講座アドバイザー
昭和十年山口県生れ。「獅林」を経て「草苑」(桂信子主宰) 創刊とともに入会。桂信子没後に創刊した「草樹」の会員としてその精神を継承。第三十五回蛇笏賞、第二十七回詩歌文学館賞、第十四回現代俳句大賞受賞。読売新聞俳壇選者。「NHK俳句」選者。句集『夏月集』『象』『記憶』『宇多喜代子俳句集成』『森へ』など。

冬の陸奥に高野ムツオの故郷を訪ねて

令和元年12月9日(月)～11日(水) (2泊3日)

訪問先 宮城県栗原市(伊豆沼ほか)

現地講師 高野ムツオ

(「小熊座」主宰、NHK学園「俳句倶楽部」講師)



俳壇で活躍中の高野ムツオ先生の生まれ育った宮城県を訪れます。

宮城県北部にしか飛来しない貴重な渡り鳥マガンをはじめとした多種多様な生物の観察や、伝統芸能「栗原神楽」をこの旅限定で披露いただきます。



現地講師
高野ムツオ

「小熊座」主宰
昭和二十二年宮城県生れ。阿部みどり女、金子兜太、佐藤鬼房に師事。現代俳句協会副会長。NHK学園俳句倶楽部講師。第四十四回現代俳句協会賞、第六十五回読売文学賞、第六回小野市詩歌文学賞、第四十八回蛇笏賞受賞。句集『陽炎の家』『萬の翅』『片翅』、著書『時代を生きた名句』など。

各スクーリングの案内書は

「NHK学園スクーリング事務局」までお電話ください。
受付時間/月～金曜日(祝日除く)の9:30～17:30

TEL 042-572-3151(代表)

FAX 042-573-6090

生涯学習フェスティバル俳句大会 投句要領

全国各地や誌上での俳句大会を開催しています。どなたでもご参加いただけます。

規定の用紙（コピー可）でご投句ください。

ひとり何組でも、どなたでも応募できます。（自由題二句または自由題二句＋題詠一句）

◆題詠 ※題詠は題からイメージされる作品募集となります。

※題詠のみの応募はできません。

◆未発表の自作に限ります（作者本人からの投句に限ります）。

◆二重投句は固くお断りいたします。

◆投句後の作品訂正、さしかえはできません。

◆同一作品、酷似作品が先行して発表されていた場合、入選・入賞を辞退していただくことがあります。

投句料

①自由題二句の場合 2、000円

②自由題二句と題詠一句の場合 2、800円

それぞれ、一冊の入選作品集代を含みます。

送金方法

◆郵便為替（定額小為替、普通為替を郵便局で購入）、現金書留、郵便払込のいずれかをご利用ください。（切手の代用は不可）

郵便払込をご利用の場合

郵便局においてある、郵便払込取扱票の通信欄に大会名、組数と投句料をご記入の上、払込みください。受領書のコピーを「のりづけ」欄に貼り付けて、ご応募ください。

口座番号…00190-5-336869

加入者名…NHK学園俳句大会事務局

賞・発表

◆大会大賞（文部科学大臣賞の候補作品となります）、市長賞、選者特選・秀作・佳作など。

◆特選・秀作内定者には事前に文書でお知らせします。

投句された方には当日会場で入選作品集をお渡しします。（誌上大会を除く）

会場参加されない方には、大会終了後に郵送します。

◆入選・入賞作品は、NHK学園で使用させていただきます。

令和元年度 NHK学園生涯学習フェスティバル俳句大会開催（予定）

大会名称	開催（発表）予定日	投句締切	題	会場
武蔵野市俳句大会	8月3日（土）	締め切りました	*野	武蔵野市民文化会館
月山俳句大会	10月23日（水）	7月19日	*信	山形県西川交流センター「あいべ」
誌上俳句大会	令和2年 3月10日（火）	12月22日	*道	—————

*題詠は題からイメージされる作品募集となりますので、作品に題にある漢字がいらなくても結構です。

月山俳句大会

山形県西川町

山形県の中央部にそびえ立つ月山で行われる大会です。この俳句のつどいにぜひご参加ください。

投句募集

自由題二句、題詠一句

題詠は「信」(テーマ詠)

題詠は「信」の漢字が入らなくても結構です。

投句締切

二〇一九年七月十九日(金)消印有効

日時

二〇一九年十月二十三日(水)

午後一時～四時

会場

西川交流センター

「あいべ」大ホール

講演

「月山と芭蕉」 宮坂静生

選者

柏原眠雨・津高里永子
星野高士・宮坂静生

【当日句選者】阿部月山子・工藤稲邨

庄司りつこ・鈴木正子

(五十音順・敬称略)

当日句募集(無料)

題「月山の秋を詠む」

当日、会場で自作一句をお出し下さい。

入賞作品は会場にて発表いたします。



雪の回廊

スキー場のオープンに合わせて除雪された雪の壁。高いところでは10mを超え、圧倒的な迫力です。

月山 俳句大会への

ご参加をお待ちしております。



残雪のブナの原生林



紅葉の月山



真冬のイベント雪旅籠

